
MHP3rd **天を穿つ弓**

綿雪ましる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MHP3rd 天を穿つ弓

【Nコード】

N5654W

【作者名】

綿雪ましろ

【あらすじ】

新米狩人である凍月天人は平均的な男性よりも遥かに筋力が弱かった。線が細く、モンスターの攻撃を食らえば一たまりもないような肢体。そんな彼がハンターになるには一般的な男性ハンターが扱う武器 太刀や大剣、ガンランスなどの近接系大型の武器ではなく、遠距離系中型の武器である弓を使うしかなかった。

始まりの街 ユクモ村（前書き）

オリジナルの設定が多数存在します。

微グロです。年齢制限はありませんが、モンスターハンターの推奨年齢以上の方を対象として書いております。

作者は中二病患者です。中二表現が苦手な方はここで引き返すことをオススメします。

ゲームに忠実ではありません。あしからず。

誤字脱字のオンパレードです。あしからず（死

以上のことを予めご了承ください。

始まりの街 ユクモ村

「お疲れ様だニヤ、ダンナ。ようやく着きましたよ」

「ダンナって……やめてくれ。俺はそんな年取ってないし実績もないし……」

荷台から降りてから青年は困ったように笑い、照れくさそうに後頭部を掻いた。ガーグアの上に乗ったアイルーはそんな青年の様子を見てため息を吐く。

「やれやれと言わんばかりに首を振り、面倒くさそうに言う。そんな様子も、たくさんの修羅場を潜ってきたからであろう、一々様になっている。」

「いいや、自信を持ってやいダンナあ。こう見てもハンターを見る目だけはあつてニヤあ。ダンナはいずれは大物になるぜい」

「過度な期待だと思ったが、とりあえず青年ははあ、と曖昧に、そしてやっぱり困ったように笑うのだった。」

「それじゃあアタシヤもう行くぜ。色々忙しい身分なんでな」

「ああ、ありがとう」

「がんばれよい、と最後に一言残すと、草むらの虫をはんでいたガーグアに鞭を打った。驚いたガーグアがその足を動かし始める。」

「ぐんぐんと加速し、勢いよく繋がれた荷台を引っ張っていく。やがてその姿はすぐに見えなくなった。」

「必然、青年だけがその場に残される。」

「…………大物、ね…………」

運び屋のアイルーが言ったことを思い出し、その青年は自嘲気味に笑った。

身長は一七〇センチ弱ほどしかない。これはハンターにしてはとも小柄なほうだ。それ故に以前いた街ではよくバカにされた。

体はとても華奢で、その線の細さは狩人であるとはとても思えない

い。小型モンスターの一薙ぎで折れてしまいそうな体つき。簡単に言ってしまうえばヒョロいのだ。

髪は漆黒の短髪。顔は整っており、その穏やかな雰囲気も相まって、狩人などやらず集会場のウェイターでもやっていけばモテそうな容貌だった。

そしてその身につけている装備は、ハンターになると決めた者に最初に与えられる、所謂初期装備　ユクモ装備一式だ。

東洋の国　この青年の故郷である　の影響を多大に受けたこの装備は動きやすさこそあれど、その耐久性は乏しい。精々最初の簡単な依頼　クエストをクリアするのが限界だろう。

しかし、そんな初期装備には似合わない武器を青年は背負っていた。

ブナハブラの素材を使った美しい模様を持つ弓　？アルクセロジヨーヌ？。

？アルクウノ？の派生先の一つであるこの弓には、雷光虫の発電機関とその効果を強化するライトクリスタルが組み込まれており、雷属性を帯びている。

ユクモ装備に似合わない弓を引っさげ、ユクモ村の大門を見つめる青年の名前は　凍月^{いてつきあま}天人。

？とある目的？の為にハンターになった、新米ハンターである。

階段を上り、大門をくぐるとそこにはどこか懐かしい、しかし少し異なつた雰囲気を持つ町並みが広がっていた。

「うわぁー」

薬や笛、トラップツールやピッケルなどを売っている雑貨屋や初心者向けの装備を整えるための武器屋、そして狩ったモンスターの素材を使って持っている武器や防具を強化したり、新しく作ったりする加工屋。

そこに住む人々をはじめ、屈強なハンターたちや狩りに役立つものを売るうとする商人たちで賑わっている。

(ここがユクモ村か……なるほど、確かに俺の故郷に似てはいるけど、少し違うかな。俺の故郷の文化をベースに独自の文化が発達した、って感じかな)

村の様子を見ながら、ゆっくりと歩いていく。

あちらこちらに大きさは色のことなるたぐさんの温泉が湯気を上げていた。驚くことに男女が混浴している。どころか、猫まで一緒に入っているものだから天人は困惑した。

(なんていうか……すげえ村だな……)

なんともボキャブラリーの少ないことを思いながら、女性の素肌を見て赤面し、うつむき加減に歩く。

そんなことをするから、前にいる人物にも気づかない。尤も、向こうの方も友人とお喋りしており前を見ていなかったのどっちもどっちだったのだが。

「うおっ」

「きやつ」

不意の衝撃に思わず倒れそうになるが、馬鹿にされないようにここは踏ん張る。

危ない危ないと胸を撫で下ろす前にはつとなり、慌てて天人はぶつかってしまった相手に頭を下げて謝った。

「すいませんっ。大丈夫ですか？」

「ああ大丈夫大丈夫。これぐらいモンスターの攻撃に比べたらなんでもないし、そんなに謝らないで」

「モンスター……？」

声は、明らかに女性のもの。恐る恐る目を開け、ゆっくりと頭を上げる。

極彩色の羽がふりふりと踊る装備　ペッコ装備の女性が、柔らかな笑みを浮かべていた。防具を着ているのを見て、ハンターなのか、と納得する。

身長は、主人公より少し低いぐらい。といっても、女性ハンターにしては高いほうであろう。さらさらと流れる金髪は、邪魔になる

からだろうか、首の辺りで切りそろえられている。可愛い、というよりは美人という感じだった。

好奇心旺盛な子供のような笑みは、これまでに沢山の男を悩殺してきただろう。天人ももちろんその男の一人で、赤みがかかっていた頬をさらに真っ赤にした。目を少し逸らしたところで、後ろに下げている柄と鞆に気づく。

（太刀、使い？ でも、女性が？）

武器には、かなり大まかに分けて二種類ある。

モンスターとの距離を詰めて切り裂いたり、打撃を加えたりする近接武器 一般では剣士用武器と呼ばれるもの。

一方はモンスターとの距離をとって遠方から矢や弾丸で攻撃をする遠距離武器 ガンナー用武器と呼ばれるもの。

前者は基本的にモンスターとの距離を詰める以上、当然攻撃を受けやすい。それだけでなく、硬いモンスターの皮や鱗を切り裂くためにはなんととっても力が必要となる。

後者はというと、距離をとって戦うためにあまり攻撃を受けることはない。ライトボウガンや弓は剣士用武器に比べ軽く、非力であっても扱える武器だ。ヘヴィボウガンというのもあるが、これはガンナー用武器の例外と言えよう。

故に、一般的には剣士用武器は男性向けの武器であり、ガンナー用武器は女性向けの武器であるという暗黙の了解があった。実際、ガンナーの男性や剣士の女性は少ない。剣士の女性がいたとしても、片手剣や双剣といった軽いものを使っているハンターの方が多かった。

故に、確かに天人の疑問は尤もだが、それは天人にも言える事であった。天人の場合、本当に非力なため仕方ないではあるが。

「あれ、君、ガンナーなんだ。弓使い？ へえー、めずらしいね」

「あんたが言えたギリじゃないでしょ、リリー」

となりの女性が突っ込む。と、ここで初めて天人はぶつかった女性と話していた女性を見た。

装備はたれ耳のような頭防具が可愛らしい、ウルク装備である。背中に下げているのは双剣だったが、見たことがないため、天人は何という武器であるかまでは分からない。

こちらはぶつかった女性よりも小さく、一五〇センチほどしかなかった。髪型や色は防具に隠れて見えない。目も黒く、容貌が天人と同じ東洋のものであるので、恐らく黒髪だろうと予想した。目は少しつり上がっており、口調とあわせて少し勝気な印象を受ける。

「こちらはこちらでまた十中八九が可愛いと言うような容貌していた。

（うわっ。どっちもレベル高……しかもウルクススとクルペッコって……。凄すぎる）

一人の男として、そして新米ハンターとして素直な感想を脳内で漏らす。

「あははは……確かにね。でもまあ、やっぱり珍しいものは珍しいし」

「まあ、そりゃね……ってか、あんた線細いわね。装備もユクモだし、新参者？」

勝気な方の少女が天人に尋ねる。つつけんどんな物言いに少したじろぎつつも、天人は頷いて答える。

「ええと、今日ここに越してきた凍月天人いてつきあまです。よろしく」

「私はリリー・アイスバーン。よろしく」

「東雲焰しののほよ。精々死なないように気をつけなさい」

「……はははは」

天人の場合、焰の言ったことはしゃれにならないので、引きつった笑みを浮かべるしかない。どうやら本当に勝気な性格ばいと天人は焰の人物像を確定した。

そんな焰の言葉に少しだけむっとしたような表情を作ると、リリ

「は子供をしかりつけるように言う。」

「こら焔。そんな言い方ないでしょ。素直に気をつけてね、って言えばいいじゃない」

「そんな親しい間柄じゃないし。ってか、そんなのあたしらしくないし。別に心配もしてないし」

「全く……ごめんね。この子、よく集会場のみんなからツンデレって言われてるのよ。本当は心配してるってこと分かってあげてね」
「なっ……!!」

リリーの発言に一瞬で焔は顔を紅潮させる。そんな様子に慄く天人にちろりを舌を出して片目を瞑り、悪戯っぽい子供のような笑みを浮かべた。

「どうやら、これが彼女たちのコミュニケーションらしい。」

「じゃあ私たちこれからクエストがあるから。また会いましょ、天人くん」

「あ、はい……って聞いてないし」

天人が答えるより早く、彼が歩いてきた道を走り出すリリー。待ちなさいっ、と焔が憤怒。周囲から見ると子供が怒っているようであり怖くはなかったが、の形相でその後を追いかける。

嵐の後の静けさに、というわけではないが、なんとなく一人取り残され寂しい気分になる。

何せ、彼はここに一人も知り合いがない。すると必然的にソロで狩りに行くことになる。新米ハンターにとってそれは心細いものなのだ。

「少しだけ彼女たちを羨ましく思いつつ、彼はさっさと村長に合うべくその歩を再び始めた。」

始まりの街 ユクモ村（後書き）

初めまして。まして、と申す者です。

この小説は私がブログに載せているものをちょちょいと修正加筆したものです。

週間ユニークアクセスが思った以上に伸びたので、これからも不定期更新で続編を書くことに決めました。

完結までに時間がかかるとは思いますが、応援よろしくおねがいます。

その腕前

あの後、村長さんに挨拶をした天人は部屋を紹介してもらった後、集会場に来ていた。ギルドカードや部屋の手続きは驚くほど早く済み、今後の資金を貯めるべく簡単なクエストを受けた方がいいと判断したためだ。

（ジャギイとかブルファンゴとかの小型モンスターのクエストで、なるべく額がいいのは……）

クエストボードに貼ってある依頼を眺めていく。ちなみに、このボードのランクは星の数によって示されており、星一つから六つまでのランクに分けられている。

このランクは難易度、というよりも危険度を示すものであり、その危険度に応じて報酬の額も変わってくる。星六つのレベルになると、縄張り争いをする大型モンスター二匹や、繁殖期のために行動を共にする雌雄の大型モンスターを同時に相手することもあ
るのだ。

さらにこのボードは二種類あり、下位クエストのボード、そして上位クエストのボードに分かれている。上位クエストはモンスターの凶暴性や体力が一回りも二周りも上がっており、危険性がさらに増した依頼が張られている。

受注できるランクはハンターの実績に応じて上がっていく。ハンターの実績はハンターランクによって示される。ハンターランクが上がる
とハンターの証であるギルドカードが更新され、そうしてようやく次のステップへ上がることが出来るのだ。

そして、天人が覗いているボードは言うまでもなく星一つのクエストボードである。額は低いが比較的危険性の低いクエストしかない。その中でも条件のいいクエストを探して視線を巡らせる。そして彼の目に一つのクエストが留まった。

「お、ジャギイノス十匹で二千Zか……ドスジャギイでもいるのか

？」

注意書きを見る限りでは、特にそういう注釈はない。天人は暫くその怪しさに逡巡したが、結局額の良さに負け、そのクエストを受注することにした。

依頼の紙を取って受付嬢の元へと持っていき、クエスト受注の旨を伝える。

「あの、すみません」

「あ、こんにちは！ ハンターズギルド・ユクモ村出張所へようこそ！ クエストの受注でしょうか？」

元気のいい返事と、爽やかな笑顔に少し驚き、身を引いてしまう。しかしそんなことお構いなしにその受付嬢はまじまじと天人の顔を見つめ始めた。

気恥ずかしくなり、天人はうつむき加減に頬を掻いて尋ねる。

「えーと、何か？」

「あ、いえ！ 新米さんですか？」

「あー。そうです。今日ここに越してきました、凍月天人つていいです。これからよろしくお願いします」

「おおー。礼儀正しい態度ですねー。関心関心。私の名前はコノハつていいです。こちらこそよろしくお願いしますね。ええと、それで用件はなんでしょう？」

「このクエストの受注をお願いします」

ハンターズギルドとは、簡単に言えつてしまえばクエストの管理者の集まりである。東西南北様々な地域からの依頼をまとめ、その依頼をランク付けし、クエストボードに貼り付けたりするのが彼女たちの仕事だ。

誤って複数のパーティが同じ依頼を受けるのを避けるため、クエストを受注するには彼女たちに申し出る必要がある。

「ふむふむ……ジャギイノス十頭の討伐……」

差し出した依頼の紙にさらさらと何かを書き込んでいく。やがて受注のための処理が終わると顔を上げてニコリと微笑む。

「受注手続き完了です！ ではハンターさん、お気をつけて」
出発口はあちらです、と手を差し伸べてコノハが言う。初めてのことで少し照れくさく、しかし満更でもないという風に天人はその出発口へと向かうのであった。

猫の荷台で揺られること十数分。ユクモ村では定番の狩り場
溪流へと到着した。

かつては集落があったらしいが、大嵐によつて吹き飛ばされたらしく、現在はもうない。しかしながら今でもその名残は見られ、住居跡や廃船、朽ちたつり橋などが見られる。

緑が豊かで水源も豊富なため、多くの動植物が生態系を構成するこの地は、それ故に多くの大型モンスターが縄張りを持つとする。溪流はユクモ村に近いだけに、依頼があとを絶える事がない。危険と思われるモンスターが現れるとすぐに討伐が依頼されるためだ。

また、狩猟だけではなく、溪流にしか生えていないタケノコや豊かな自然で丸々と育ったガーグアの卵の納品依頼も多い。

現在天人がいる場所は溪流のキャンプの一つの狭い高地である。ここからは美しい溪流が流れる谷を挟んで向かいの産地まで見渡すことが出来、数あるキャンプの中でもハンターから人気のキャンプであった。

もちろん、今日来たばかりの天人はそんなこと知る由もなく、ただキレイだな、と思っただけでそれ以上のものは何も感じなかったが。

(さて……ジャギイノスはどこだろうか)

照りつける日差しを遮るために頭防具、ユクモノカサを少しだけ深めにかぶる。

キャンプ地から出ると早速野性のガーグアに出くわした。丸々と

太つてとても美味しそうだと、初めて見た者は思ったりもするが、天人はただ和むなあと、平和ボケしたことを思っただけだった。

さらにそこから少し歩き、ようやく小型の鳥竜種の影が遠方でちらりと確認できた。天人は岩の物陰に隠れて畳んでいた愛弓を展開し、狙いを定める。

（さてと……じゃあ、行きますかっ！）

矢を取り出し、ぎりぎりとは弦を引いていく。限界まで引いたところで、それを？天空？へと放った。

山なりに放たれた矢は途中でばらけ、雨のように見かけた鳥竜種に襲い掛かる。その降り注ぐ範囲は決して広いものではないが、しかしその全てが一匹の鳥竜種に命中する。

？曲射？。弓の強攻撃の一つであり、山なりに放たれた矢が途中でばらけ、雨となり襲い掛かる特殊な攻撃である。その種類には、広い範囲で降り注ぐ放射型、狭い範囲だが大型モンスターの翼などの部位を破壊しやすい集中型、そして着地と同時に爆発する爆裂型がある。

そして天人が持っている？アルクセロジョー又？は集中型なのであった。

雷の力を宿した矢の雨に襲われ、堪らずに絶命する。しかし、その倒れた鳥竜種はただのジャギイだった。こちらに気づいたジャギイやジャギイノスの群れが異変に気づき、喧しく鳴き始める。危機が群れに伝わり、全てが一斉に天人の方へと向く。ツチ、と舌打ちして、天人岩陰から飛び出した。

小型といえども列記とした肉食モンスターには変わらない。人間の数倍もの嗅覚の前では岩陰に隠れてもその意味はほぼないに等しい。

きりきりと弓を引きながら走る。前方からは、三匹のジャギイと二匹のジャギイノス。その内の最前を走る一匹ジャギイにまずは狙いを定める。

最前を走るジャギイが天人に飛び掛った。同時、限界まで引かれ

た矢が放たれる。

複数の矢が連続で飛んでいき、その全てがジャギイの顔面を捕らえる。顔を潰され、気づかぬうちに絶命するジャギイの脇を抜ける頃、既に第二射目の矢が引かれている。

次に迫るジャギイとジャギイノスの数は三匹。同じ手は通用しないとい瞬で理解し、限界の一步手前でその矢を放った。

放たれた矢は先のように連続して飛んでいくのではなく、途中で広がり、拡散する。三匹全てに矢が命中したものの、その矢にひるんだのは左と真ん中を走っていたジャギイだけ。右側にいたジャギイノスは多少のダメージなどものとせず走ってくる。

しかし、天人は慌てない。

左手で静かに矢を取り出すと、それを逆手に構えた。思い切りジャギイノスへと突っ込むようにして走り、衝突する寸前で少しその軌道を横へとずらしてすれ違う。途端、交錯する一瞬のうちに喉を裂かれたジャギイノスが倒れる。

そのまま前転し、大きく横へ跳ぶ。最後尾のジャギイノスの真横を捉えると、即座に弓を構えて再び矢を放った。同じように途中で拡散するも、その数は圧倒的に少ない。弓の特徴の一つ、弦の引き具合による矢の形式変化をうまい具合に使っているのだ。

最小限の力で引かれた弓の勢いは確かに今まで放たれたものの中で最弱だったが、それでも複数の矢が全て当たればそこその痛手にはなる。堪らずにひるむジャギイノスに急速に接近し、握った矢を思い切り急所に叩き込み、絶命させる。

しかし、まだ息を吐く暇はない。先ほどひるんだジャギイ二匹が時間差で飛び掛ってきた。が、これを冷静に大きくバックステップしてよける。

それでも距離を詰めようとするジャギイのうち、先頭に立つ一匹に狙いを定めた。

つま先で砂を巻き上げ、一瞬そのジャギイの視界を奪う。しかし、その一瞬は天人にとって十分すぎた。地を蹴って距離を一気に詰め、

取り出した矢で足を止めたジャギイの喉を切り裂き、止めを刺す。

その切り裂いた矢をそのまま引き、眼前で飛び掛らんとするジャギイへと放つ。拡散したとはいえ、至近距離では意味がない。全ての矢がジャギイへと吸い込まれ、どさりと墜落する。ぴくぴくと体を痙攣させるとやがて、そのまま息絶えた。

ふう、とここでようやく一息吐く。汗を拭い、まだ敵はいないかと周囲をうかがって安全を確認すると弓を折りたたみ、脱力したように座り込んだ。

「疲れたあ……あと八匹もやるのか。案外大変じゃんか。楽だななんて誰が言ったんだよったく」

こう言っているものの、全てのジャギイとジャギイノスを討伐するのにかかった時間は一分も経っていない。この手際の良さは最早初心者のもとは程遠いものだった。

才能。

言ってしまうえば、それだけ。

しかし、本人はそれを自覚していない。どころか、才能なんてものを持っていないとすら思っている。それは自分が非力で、線が細いことから周囲から馬鹿にされているために生まれた思い込みだった。それだけでなく？とある事情？を抱え込んでいるというわけもあるのだが。

天人は腰に下げたひょうたんの冷たい水で喉を潤すと、一括入れるように自分の太ももを叩き立ち上がった。

残るジャギイノスは八匹。とは言っても、それはあくまでここら一帯で確認された数でしかない。

あくまで討伐する数は依頼者が確認した数であって、それは？正確な数？であるとは限らないのだ。故に、ハンターは指定された数のモンスターを倒しても暫く指定地域一帯を歩き回ることが常識だった。

「さあつて。何といつても俺の初仕事だし、頑張ろう」
ひょうたんを再び腰に下げ、意気揚々と天人は再び歩を進めた。

嬉しくない出会いと幸運な再会と

弓を構えながら水辺を疾駆する。足を一步前に出すたびに水が跳ね、防具を濡らしていくことを気にしている余裕もない。

天人は現在、ようやく八体目のジャギイノスを含む群れを発見し、それと相見えていた。既に群れの残りはこのジャギイノスだけとなっており、狩ることは容易いだろう。

とはいえ、これまでに潰してきた群れの数は五つ。群れの中にはジャギイノスがいないものもあり、その度に一々群れを潰していたものだから、天人は少し疲弊していた。

そして、その疲弊は当然、狩りにも影響を及ぼす。

突如、がくと天人の足元がもつれた。平地なら恐らくまだ普通に走れただろうが、水辺を走るのは体力を激しく奪われる。今回はそれが祟った。

「しまっ」

その際に、矢があられもない方向へと飛んでいく。舌打ちをする暇もない。すぐさま前転して受身を取り、再び弓を構えるが、その頃には既に天人に飛びかかっていた。

「つくうっ！」

堪えることも出来ずに倒れこみ、ばしゃりと水飛沫を上げた。覆いかぶさったジャギイノスが天人を必殺すべく、喉に噛み付こうと狙いを定める！

（喉！？ マズっ！）

その瞬間。

ぴたりとジャギイノスが動きを止め、その首を後方に回した。

もちろん、その隙を天人が利用しないはずがない。

天人を押さえつける足を矢で思い切り突き刺す。押さえつける力の弱まった一瞬を狙い、全身全霊の力を振り絞ってジャギイノスを跳ね除けると、後退しつつ最小限の動きと力でありつただけの矢をジ

ヤギイノスの注ぎ込んだ。

数にものを言わせる、強引な手段。普段の天人なら絶対にやらないことだったが、タイムンという状況と死んでいたかもしれない恐怖から自然と手が動いてしまっていた。

やがて、ジャギイノスがその動きを完全に止める。それを見た天人は、へなへなとその場に座り込んだ。

防具の隙間からひんやりとした清水が心地よい。生きてる、という当たり前の実感を感じて天人は大きく息を吐いた。

「し、死ぬかと思った……。流石、日ごろからアケノプスだのケルビだのを狩ってるだけあるな……。ってか、どうして動きを止めたんだ……。？」

そつえば、という風に天人はそこで初めてジャギイノスが気を散らした方へと視線をやる。

「……あ？」

青い空に、こちらに飛来する小さな影。

羽を持ち、空を自由に飛び回るモンスターは限られた種類しかない。

「おいおいおいおいおい……っ！」

モンスターの中でも、特に危険なモンスターが多い種族　飛竜種。

強靭な翼。逞しい足。長く太い尻尾。凄まじい筋力でそれらを駆使して襲い掛かってくる飛竜種は、ハンターランクの高い者しか相手をすることを許されない。

理由は単純に、ランクの低いハンターが戦ったところで振り返り討ちにあつて死んでしまうだけだから。

（勘弁、してくれ……）

がたがたと体が震えだす。

止まれ、止まれと両腕で体を抱く。しかし、震えは治まるどころかさらに激しさを増していく。

拳句　じゆくじゆくと？右腕に痛み？が走る錯覚に陥る。

（大丈夫だ。落ち着け。冷静に対処しろ）

普通に考えて、まず飛竜種に勝てるはずがない。

生まれたばかりのケルビのように震える足を拳で殴りつけ、立ち上がる。その足取りはおぼつかなく、先ほどの勇ましさなど微塵も感じられない。

（どうする？　物陰に隠れてやり過ぎすか……）

段々と近づいてくる影に、いよいよ天人の焦りがピークを迎える。
（どうするどうするどうするどうするどうするどうするどうするどうするどうする……！）

だらだらと嫌な汗が背を伝っていく。

やっこの思いで一番近くの大木の陰に隠れると、一気に脱力し、尻餅をつくようにして座り込んだ。大きな深呼吸を一つして、冷静になろうと努める。

顔だけを覗かせ、新たな脅威の姿を確認する。ゆったりと降りてくるモンスターの羽ばたきの音はそう遠くない。ごくりと、緊張に生唾を飲んだ。

しかし、その天人の心配は杞憂に終わる。

（……え？）

飛竜種に比べると小さな水音を立てて降り立ったのは？鳥竜種？

極彩鳥、クルペッコだった。

「な、なんだよ……脅かしやがって」

ほっと一息吐く。？飛竜種でないなら？例え大型モンスターであるろうと問題ない。

（なるほど、ね。たかがジャギイノス十匹であんなに値がよかったのはこういうことが……。備考の不足。しかも故意的。ギルドに要報告だな）

ギルドに帰った後に出来ることが早速出来る。出来ればこのクエストが終わったらずぐにでも休みたかったのだが、これは重要なこ

とだ。

出現モンスターの情報は丁寧でなければならぬ。討伐対象が例え小型だとしても、そのエリアに出るモンスターが危険度の高いモンスターであれば、無論それだけクエストのランクは上がる。

クルペッコは大型の飛竜に比べると小さい中型のモンスターだが、それでも初心者が相手をするには荷が重い。少なくとも、天人の受けたクエストのランクは星一つでは収まらなくなるはずだ。

そつと身をかがめ、クルペッコをなるべく刺激しないようにこの場を離れる。

大型のモンスターは知性が高い。危険がないと判断すれば襲い掛かってくることもないのだ。ハンターを好んで攻撃してくるモンスターは、一部の小型モンスターを除きあまり多くないのである。

「お前には用がないんだよ……」

小声で呟きながら、ひっそりと移動する。ふと、クルペッコがこちらに気づいた。攻撃の意思はないし、相手もまさか襲い掛かって気やしないだろうと高をくくり、あまつさえ手を振ってみたりした。

その途端、クルペッコが甲高い声を上げて怒り出した。

「……え？」

想定外の出来事に天人は思わず動きを止める。そうしている間にも、クルペッコは両翼に付いている石を打ち鳴らして火花を散らし、攻撃のモーションに入る。

「俺が何したってんだ！」

どうすることも出来ず、？アルクセロジョーヌ？を展開してクルペッコに背を向けた。

倒すためではなく、逃げるための戦闘。とはいっても、中型以上のモンスターとの戦闘はこれが初めての経験となる。

それは間違いなく今後の経験値になるはずである。

クルペッコが天人めがけて大きくステップを踏む。打ち付けた石

が散らす火花が一際大きなものとなり、炸裂した。

(うお　っ!?)

咄嗟に前転し、これを避ける。五、六メートルもの距離をステツプ一回でゼロにしたその強靱な足もそうだが、なによりその攻撃性能に天人は戦慄した。

当然ながら、中型といえどもその火力は侮ることなど出来ない。ましてや、このクルペッコは激昂しているのだ。その攻撃力は通常の状態を遥かに凌駕する。

さらに、ハンターランクの低い天人は今まで小型モンスターしか相手をしたことがない。故に、属性付加された攻撃を初めて見たのだ。焦りはより増していく。

前転した直後、素早く反転しクルペッコに向き直る。クルペッコはまだその石　火打石を打ちつけようと構えており、連続で爆発させるようだった。

クルペッコがステップを踏んだ瞬間、矢を左手で抜き取って即座にスライディングの要領でクルペッコの懐に入り込む。クルペッコの真下をくぐる形となり、足を矢で切り裂いた。

「っ!?!」

が、矢で切り裂いた足は、大した手ごたえを感じることが出来なかった。一瞥を向け、瞬時にその傷を確認すると少し裂けて血がにじんでいる程度。その鱗の強固さに驚愕し顔をこわばらせつつも、冷静に前転して受身を取ってクルペッコの方へと向き直った。

鋭い足の爪がかすって避けた頬から、ツウーっ　と血が流れる。

爆発に遮られ、突然視界から消えたように見えた標的を探すのに二秒。その二秒でバックステップでしゅっ　矢を放って距離を稼ぐ。弾ける水音にクルペッコが振り向く。

ここで初めて、天人はこのクルペッコと真正面から対峙した。

そのクルペッコの姿を見て、ようやく突然襲ってきた理由を天人は理解する。

クルペッコはすでに傷まみれで手負いの状態だった。体や羽、嘴

には無数の切り傷があり、美しい極彩色の羽がところどころ赤く染まっている。

「ってことはここらで誰かがコイツとっ！」

ハンターがモンスターを見失わないように投げつけるペイントボールの臭いを感じない。恐らく、ペイントボールの効力が切れるというタイミングでクルペッコが逃げ出したのだろう。

ということは。

一瞬でも期待した助けはすぐには来ないということになる。

しかし、クルペッコの飛んでいった方向で大よその検討はつけているはず。冷や汗を流しながらも、視線だけをクルペッコに向けて逃走する。そんな中でも冷静に頭をめぐらせて対策を考える。

（今持っているものは、回復薬が三つに閃光玉が二つ……畜生、こんな奴がいるって知ってたら閃光玉なんてジャギイに使わなかったのにつ！）

考えている間にもクルペッコはぐんぐんとその差を詰めてくる。折角作った距離は、クルペッコにとってないにも等しいものでしかなかった。

「つくしょうっ！」

弓を振るい、慣れた手つきでそれを一瞬で畳むと、下げているポーチから閃光玉を取り出してピンを外した。それを後ろに放り、ぎゅっと目を瞑る。

甲高く響く、クルペッコの悲鳴。

厳しい自然に生きるモンスターは人間よりも遙かに視力がいい。故にこういった強烈な光には弱く、その場で混乱してしまうのだ。無論、何度も使用するとモンスターはその適応力を働かせて段々と効き目が薄くなる。

とはいっても、その混乱は精々十数秒から数秒。天人はその時間に大木の陰に隠れるのがやっとだった。

首を振り、混乱から立ち直るクルペッコを見やり、今後の対応を慎重に考える。

(このまま身を潜めてクルペッコが去ってくれるのを待つか？ いや、小型モンスターもここらにはいる……いつまで隠れていられるかも分からない)

今でこそ相手をしているのはクルペッコ一体だが、いつかここらを住処とする小型モンスターに見つかるか分からない。隠れているからといって、決してそこが安全であるとは限らない。

(こつちから仕掛けるしかないか……)

足は既にかくかくと笑い始めている。疲労が溜まっていた足に鞭打つての全力疾走で、既に天人は限界に近かった。

手ごろで平べったいな石を拾い上げ、それを握り締めてクルペッコを見やる。

依然としてきよるきよると天人の姿を探している。天人は自分が隠れている方向とは反対のほうを探している隙に、その石をスナッブをきかせて回転をかけ思いつきり投げた。

ところがその石はクルペッコから大きく逸れ、そのまま川へと落ちず、軽快なリズムを刻んで跳ねた。

その音にクルペッコが反応する。

「っ！！」

一瞬の隙。その隙を突いて天人は影から飛び出し？アルクセロジヨーン？を展開、矢を放つ。

クルペッコの背後にありつたけの矢を注ぎ込んでいく。指と指の間に矢を挟み一度に四の矢を同時に抜き取り、矢を抜く動作を短縮、最大限の速度で矢を放出する。

一際大きな声を上げてクルペッコが怯んだ。雷を纏う矢はかすっただけでも凄まじい電流で皮膚を焼く。それが次々と刺さっているのだから、そのダメージ量は相当なものであるはずだった。

「倒れるおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

額に汗を滲ませ、咆哮を上げる。腕は既に力が入らないぐらいに震えている。それでも矢を放ち続けられるのは、火事場の馬鹿力という奴であろう。

やがて、クルペッコが悲鳴も上げずにがくりと倒れた。はあはあ
と荒い息を吐きながら、天人はそれを呆然と眺める。

「やった、のか……？」

？アルクセロジョーヌ？を右手に持ったまま、無用心にクルペッコに近づいていく。

熟練のハンターなら、こういうときは石を投げつけて見たりしてその生死を確認する。しかし、天人はこれが初めての中型以上の戦闘。

そしてなりより、？初めての戦闘で倒した？という達成感から危機感が麻痺していた。

故に気づかない。

クルペッコは、ただ膝を突いただけであると。

「！？」

先ほど彼が出した声とは比べ物にならないほど大きな咆哮を上げ、突如動き出したクルペッコに驚愕する天人。慌てて矢を抜き取るうとするが、扇状に開かれた尻尾をぶち当てられ、大きく吹き飛んだ。その際、不覚にもハンターの命である武器を手放してしまった。

ばしゃばしゃと盛大に飛沫を上げながら水辺を転がる。

「っ痛　！」

声を上げる余裕もない。すぐに立ち上がると叩きつけられたわき腹を押さえ、自分の武器を探す。

幸い、天人からそう距離は離れていない。彼は大きく跳んで前転すると弓を取り、矢を構えた。しかしその頃には　もう遅かった。火打石を叩きつけ、大きくこちらへ踏み出すクルペッコの姿がその瞳に映る。

そこで天人はあろうことが、反射的に目を瞑ってしまった。

（あ、俺死　）

そう思った途端だった。

ギンツ！　というモンスターの嫌う高音と、

ギヤア！　というクルペッコの悲鳴。

そして、天人の脇を駆ける二つの足音。

「あらあら、誰かと思えばさっき街で会った天人君じゃない」

「なんでこんなところにいるの、よっ！」

聞き覚えのある声。うっすらと目を開けると、そこには天人より少し背の低いクルペッコ装備の女の子とそれよりもまた一回り小さいウルク装備の女の子がいた。

つかの間の安心、最悪の到来

二人は見事なコンビネーションでクルペッコを翻弄していた。洗練された鋭い刃が右翼を切り裂き、極限まで研ぎ澄まされた二つの閃きが左翼を切り刻む。

お互いが常にお互いを意識し、決して味方を傷つけることはない。そんな二人を天人は啞然として眺めていた。そんな様子をちらりと見やり、焰が叱咤する。

「ぼさつとしてないでさっさと退いてなさいっ！ 邪魔っ！！」

「あ、す、すいません」

小さな女の子に怒鳴られていそいそと後退していく。少しだけ自分が情けなくなる。

そこからは、ほとんどワンサイドゲームだった。

攻撃のパターンを既に知り尽くしているのだろう。クルペッコの攻撃が全くあたらない。

時折クルペッコの反撃がくるも、どれも掠る程度で決定的な攻撃は全てかわされていた。

磨きぬかれた技術。

圧倒的な手数。

目を見張るような立ち回り。

そして何よりも、踏んできた場数。

何もかもが、天人から程遠いものだった。

(…… ああ、俺はやっぱり)

やがて、クルペッコは一際大きな声を上げる。

それは悲鳴というよりは、残りの力を振り絞って何かを呼ぶような、助けを求めるような咆哮。

しかし、それまでだった。力尽き、ぐらりと体を揺らすと極彩色の羽を散らしながら水辺に身を横たえた。

(まだまだなんだなあ)

二人の戦いっぷりに、思わず嘆息する。

「あらら？　なんだか随分とあっさり倒してしまっただわね、今回。今まではもうちよつと強かったと思うんだけど……」

戦闘が終わったのを確認し、天人は木の陰からようやく身を出して二人に駆け寄った。リリーがぼやいているのを聞いて、肩をすぼめる。

「あ、すみません。襲われたのでちよつと戦闘してました。その際に結構なダメージを与えちゃったのかも」

「はあ？」

驚き、というよりも呆れに近いだろうか。焔が信じられないものでも見たかのように天人を見る。それはリリーも同じようで、驚愕の表情を浮かべていた。

「あんだ、新米ハンターのくせしてクルペッコとやりあってたの？　馬鹿じゃないの？　死にたいの？」

「え、ええと、俺も本当は戦うつもりなんてなかったんだけど、どうやら君たちと戦って人間に対して敵対心があったみたいでさ。俺を見るなりいきなり襲い掛かってきたから、仕方なく……」

「そもそも、どうしてこんなところにあんたがいるのよ！？　今日ユクモ村に来たばかりなんでしょ！？」

「思ったよりも早く手続きが終わったから、今後の資金稼ぎにでも出ようとジャギイノスの討伐に出てただけど、どうやらエリアが君たちの搜索範囲と若干被ってたみたいだね」

「なんていうか、本当に偶然が重なったみたいだね……。まあとにかく、これはギルドの不注意だから、あとで報告しておくとして。今はとにかく勝利を喜びましょう」

「すみません、と困ったように曖昧に笑う天人を見て、リリーはふと思つ。」

(私たちがクルペッコを手負いにしたとは言っても、まだ結構な体力は残っていたと思うんだけどね)

彼女たちがクルペッコを見失って見つかるまでにかかった時間は、およそ十五分。クルペッコが飛行していた時間は大体三分ほどだろう。

すなわち、彼は初めてのクルペッコとの戦闘で、あまつさえクモ装備という最弱クラスの装備で十分以上も戦っていたことになる。それも、かなりいい線で。

(初めて戦ったときは、二人で十分ももたなかったんだけどなー。みつともなく敗走にまわったっけ)

それは剣士とガンナーという違いもあるだろうが、それでも装備や人数を考慮に入れると間違いなく彼の戦闘時間は長い。

へらへらと笑いながら、最早怒っているのか安心したのか分からないようなことを延々と続ける焔を受け流す天人の才能にリリーは興味を持った。

あるいは、自分たちのパーティの穴を埋められる人材かもしれない、と。

「大体、初心者のかせいでしゃばりすぎなのよ！ 引越してきた日ぐらい休んでれば」

「はいはい。焔のお小言はもうとーっても天人くんの身にしてみたはずだから、さっさとクルペッコの素材を剥ぎ取って帰りましょう」

「がみがみと喋る焔を引つ張り、クルペッコの素材の剥ぎ取りに入る。羽や鱗、クチバシ、火打石が剥ぎ取られていく。」

そんな二人の様子を眺めるだけの天人に焔がツンと刺々しく言った。

「あんたも木偶の坊みたいに突っ立ってるんじゃないやなくてさっさと剥ぎ取りなさいよ」

「え？ でも俺はこのクエスト受けてないし、倒してないんだけど」「あーもううじうじっさい！ さっさと剥ぎ取りなさい！」

「そうよ天人くん。クエストを請け負ってないとはいつても、クル

ペッコを瀕死まで追い込んだのは紛れもなく君なんだから」

リリーも剥ぎ取るよう催促した。天人は二人に許可を貰って初めておずおずとクルペッコから素材を剥ぎ取り始める。

剥ぎ取り、といってもモンスターの全身から皮、鱗、羽を全て剥ぎ取るわけではない。倒したモンスターの一部から目立たない程度に剥ぎ取るだけだ。これは古くからの伝統で、倒したモンスターに一定以上の敬意を持つことを暗示しているらしい。

元々は、狩りは集落の暮らしを楽にするためのものだった。良質な皮や羽があればそれだけ上質な服が作れる。かつてのハンターは殺した命に感謝の念を持っていたのだという。

三人もクルペッコからあくまで剥ぎ取られた部分が目立たない程度に素材を剥ぎ取ると立ち上がった。

「さて、それじゃあ私たちはあつちにキャンプがあるから」

「はい。俺はまだあと二体ジャギイノスを倒さないといけないので、もう少ししてから帰ります」

「油断なんかしてやられたりなんかするんじゃないわよ。あんた、ただでさえなんか抜けてそうだし」

あははは、と少女の辛らつな言葉に力なく笑って頂垂れた。さつき、本気で死に掛けた事実もあり、己の未熟さにかつくしと肩を下げる。

「狩りはギルドに着くまでが狩りだからね」

「遠足じゃないですか、それ」

「うるさい。突っ込むな一々バカ」

「ごめん……」

どうも彼は焰に頭が上がらないようだった。そんな様子をニコニコと眺めているリリー。三人の力の序列はどうやら既に決まっているようだった。

「じゃあまた後で」

「ええ、ギルドで会いま」

目の前の脅威に危険感覚が麻痺した天人はぼんやりと考える。そういえば、息絶える前に一際大きな声で鳴いていた。あれはこのリオレイアを呼ぶものだったんじゃないか。

クルペッコの特徴は、何よりもその発達した発声器官である。その発声器官を伸縮させることで様々な音域の音を出すことが出来、身に危険が及ぶと鳴き声をまねることでその場の近くにいるモンスターを呼ぶことがあるのだ。

もしかしたら、値が高かったのはクルペッコがいたからではなく、リオレイアがいたからじゃないか、と思い　左の頬に熱い衝撃。「しつかりして！　逃げるわよ！」

顔を真っ赤に染め上げてがくがくと天人の体を揺さぶる焔がいた。頬の痛みは、恐らく平手打ちによるものだろう。

それでも呆然とする天人を、半ば引きずるような形で引つ張り、逃げる。地に降り立った陸の女王は、それをやすやすとは逃がそうとしない。

口元で散る火が一層強いものとなる。来る、とリリーは今までの狩猟の経験で感じた。

「よけて！」

直後、全てを焼き尽くす地獄の火球が飛んでくる。

全力で横に飛んだ。すれすれで火球が脇を抜ける。ちりちりと肌の焼ける感覚に、三人は戦慄した。

「っ！」

迷っている暇はない。焔は天人の手を引いてる右手はそのままに左手で閃光玉を取り出すと口でピンを外し、後ろは見ずにそれを放り投げた。

強烈な閃きと、リオレイアの悲鳴。

振り向く時間さえ惜しい。三人は力の限り走り、混乱が解ける寸前で岩陰に身を隠す。

（稼げた距離は……ざっと五十メートルぐらいかしら。焔と私だけ

ならまだしも、この状態の天人くんを連れての逃走はちょっと厳しいわね……)

天人は岩陰で膝を抱えて震えている。尋常じゃない反応に、二人はそんなに怖いのかと不思議に思う。でも、危険度が違うとはいえクルペッコとはいいい線で戦ったのに何故。

視線を逸らし、岩陰からこっそりと窺ってみると、リオレイアは依然としてリリーたちを探している。小さく舌打ちし、現在の持ち物を確かめる。

(あるのは……シビレ罨と、閃光玉が三つ。音爆弾が二つに回復薬と砥石。逃げるだけなら……なんとかなるかしら)

視線だけで焔にも持ち物の確認を促す。

焔がポーチの中を晒すと、リリーはその中を覗き込んだ。不幸中の幸いか、合わせて閃光玉は七つ、音爆弾は三つあった。

(逃げに必要な道具は十分ね)

そう判断し、?念のために?リリーは愛刀である太刀 ? 鉄刀

【神楽】?の刃を研いだ。クルペッコの戦闘で欠けていた刃が途端にその切れ味を取り戻す。

同様に焔も愛刀の双剣、?スノウツインズ?を研ぐ。

焔が双剣を研ぎ終えた直後。

「
!?!」

大地が跳ねた。慌ててリオレイアを見れば、探すのにうんざりしたのか、あちらこちらに火球を放っていた。

火球にあたった木々は、直径五十センチはあろうかという幹を一瞬で炭化させ、めしめしと音を立てて倒れる。ぞっとする光景に、しかし冷や汗を流しつつもリリーと焔は薄く笑う。

モンスターといえども、人間と同じように生き物であることには変わらないのだ。

火球を放つことは大きくスタミナを消費するはずである。スタミナの切れたモンスターは、その攻撃力や俊敏性が大きく落ち、攻撃

するにせよ逃げるにせよ大きなチャンスとなる。

二人は視線を重ねて頷いた。それだけで意思の疎通が取れているのを見ると、とても深い信頼関係にあることがうかがえる。

「天人くん、逃げるよ。立てる？」

リリーが小声で天人に話しかける。辛うじて、といった様子で頷くものの、リリーはそんな天人を見て逃げ切れるのかと不安に思う。天人はリリーが差し出した手を引き、なんとか立ち上がった。

「焰」

「オーケー」

逃げ出す方向とは逆向きに、焰は何かを放る。

瞬間、甲高い炸裂音。音爆弾がモンスター嫌う高音を撒き散らす。

遠すぎたのか、元々効果が薄いのか、リオレイアが平然として鋭い視線をそちらへ向ける。その隙に脱兎の如く走り出した。

全力の疾走。後ろを振り向くこともなく、ただひたすらに走る。

途中、リリーが走ったまま後ろに閃光玉を投げた。それが爆発すると同時に、強烈な閃光が辺りを白く染める。

足が水を蹴る音でもはや何も聞こえない。あるいは？そもそも悲鳴が上がってない？のか。天人は背後で何も聞こえないことに疑問を抱いた。しかし、全力疾走中に話しかけることもできない。

スタミナが許す限り全力で走った三人は、二分ほど走ったところでようやくその足を止めた。後ろを確認するも、リオレイアの姿は確認できない。

「撒いた、かしら？」

「ええ。撒いたつばいわね」

息も絶え絶えに焰が答える。吐き出す息が熱い。水場は既に抜けたようで、木々の茂る森の中に三人は入っていた。

空は風にそよぐ葉に覆われてその姿の大半を隠している。

体が熱い。喉が渴いた。どこかに水はないだろうか。

水源豊かな溪流だからその疑問。焔はあたりをきよるきよると見回す。リリーも安心しきった様子で汗を拭って倒木に腰を下ろしていた。

ただ一人、天人だけが釈然としない様子で空を眺める。

「あ、湧き水」

目聡くちよろちよろと湧き出る水を見つける。

ラッキー、と先の全力疾走による疲労を感じさせない足取りで焔がそこへ近寄った。ユクモ村特有の竹製の水筒をとりだし、それを汲もうとした。

「焔！ 後ろだっ！」

静けさを断ち切るような、天人の切羽詰った声。ほとんど無意識に大きく横へ跳ぶ。

直後、今さつき焔が立っていた場所が爆ぜた。

身を転がしながら背中の中剣を抜き取る。リリーもすぐさま太刀を抜いた。鈍い銀色が新緑の鱗を映す。

倒木の近くにいたリリーと天人、そして湧き水の傍にいる焔の丁度中間ぐらいの位置にリオレイアが降り立った。その鋭い眼光が焔を突き刺し、萎縮させる。

（飛んでいたのか。くそっ）

陸の女王と呼ばれていても、元は飛竜。その強靱な翼を羽ばたかせ、天高く舞うことなど造作もない。

三人とも理解する。このリオレイアから逃げることは出来ない。生きたければ戦うしかない、と。

「天人くんは逃げて！ 私たちがこいつは引き受ける！」

「な」

何を言ってるんだ。そうは言えなかった。

幼少の頃、天人は飛竜に襲われた。

元々森を一人、奔放に駆け回ってはケルビを追いかけたりするよ
うなやんちゃな子供だった。天人の住む村の近くの森には肉食系の
モンスターがほとんどおらず、厳しく注意する者などいなかった。
故に事件は起こる。

いつも通り森で遊んでいたとき。大人しい草食系モンスターであ
るアケノプスたちの背に乗っていた最中だった。

突然に天人が背に乗っていたアケノプスたちが狂乱し、天人はそ
の背中から振り落とされた。群れは恐慌し、我先にと逃げ出す。

何事だろう。幼い天人は、それに何の疑問も抱かない。

ふわりと天人の髪が風に靡いた。突如起きた風に驚き、天人は振
り向く。

銀色の太陽が、そこにはいた。

恐怖を通り越し自我を失った天人は、ぼんやりと銀に煌く飛竜を
眺めるだけ。

やがてその太陽は高らかに吼える。鼓膜が破れそうな咆哮に、耳
を押さえぎゆつと目を瞑った。

(……………あ?)

妙な浮遊感。気づけば、体が宙を舞っていた。ゆつたりと流れる
景色。直後、墮落。

体を地面に強く打ちつけ、息が詰まる。げほげほと咳をして何と
か呼吸を整えると、体を起こそうと右腕に力を込めた。はずだっ
た。

?力が入らない?。

ゆつくりと首を動かし、右腕を見る。

「あ」

右腕はぎつくりと挟まれ、滝のような血を流していた。傷を見た
瞬間、灼熱の痛みが右腕に走る。

ギヤアアアアアア！ 銀の太陽が吼える。突然のことに何が起きたか分からない天人は、しかししっかりと見た。

先まで天人を飲み込もうとした口には、矢が刺さっている。

「大丈夫か少年」

静かな声。振り向くと見知らぬハンターがそこにいた。屈強な体には無数の傷があり、熟練したハンターであることがうかがえる。手には弓が握られており、男にしては珍しいガンナーのハンターだった。

放心したままゆったりと首を縦に振ると、そのハンターは笑って、「逃げる」

ただ一言。それだけ。

天人は駆けた。今まで出したこともないような速さで、後ろで、激しい爆発音が響く。恐怖でびくつきながらも、その足の動きだけは絶対に止めない。

涙がこぼれる。恐怖？ それもちろんあった。痛み？ 激痛は確かにつらい。しかし、天人はただ、悔しかった。

（何のために、俺はハンターになったんだっ！）

恐怖から、体が震える。そんな自分を情けなく思う。それでも体は動かなかった。

「早くっ！」

「っ！」

天人は逃げ出した。あの時のように。ただ自責の念に駆られながら。

降りしきるは雷の雨

天人が逃げたのを横目に確かめ、改めてリオレイアと対峙する。その視線は焰の方を向いていて、一先ず天人を追いかけることはなさそうだった。

すこしだけ落胆する。天人は自分が思っていたほど大したことはないのかもしれない。過大評価だったか、と。

「焰！」

「うんっ！」

強く地を蹴り、二人は接近する。

吐き出された火球を紙一重で避けると、リオレイアの懐に潜り込んだ。

氷結の刃がリオレイアの首を切り刻む。しかし、その強固な鱗は斬撃をはじき返し、大した傷を負わせることが出来ない。

歯噛みする。クルペッコの鱗より堅い。

焰とすれ違いざま、リリーが太刀を思い切り振り下ろす。これもやっぱり大した傷を付けられない。若干血が滲む程度。

二人はほぼ同時にリオレイアの元から離脱、距離を取る。基本的に大きな相手は小型のモンスターよりも俊敏性に欠ける。あくまで小型と比べて、だが。それでも距離をとるだけの隙はあった。

再びリオレイアを挟む形になる。

火球は避けられると踏んだのか、リリーに向かって突進を仕掛けてきた。

「ツク！」

リオレイアを中心に円を描くように走るが、避けきれない。一瞬でそう踏んだリリーはリオレイアの突進が当たる直前、大きく後方へ跳び、衝撃を和らげる。

「リリー！」

「大丈夫ッ！」

踏ん張り、何とか倒れずに大きく後ずさる。痛みに顔をしかめつつ、傷を確認。

骨は……折れていない。

そうは言ってもかなりの痛み。痣になっているのは間違いないだろう。今の突進。距離をとるのはまずいかもしれない。

リオレイアばりりを吹き飛ばした後反転し、焰の方を向いていた。今度は火球。前転で危なげなく避ける。

「張り付くよ！」

リリーの一声で二人が同時にリオレイアとの距離を詰めた。太刀と双剣。合わせて三つの閃きがリオレイアを切り刻む。

鬱陶しそうにリオレイアが羽ばたき、宙へと逃げた。その際に火球を放つ。二人はステップを踏むように左右へ避ける。

これは、チャンスだ。

リリーが納刀した。一秒にも満たない間に閃光玉を取り出し、視線だけで言葉を交わす。

焰が大きく退いた。同時、世界が白く染まる。

聞こえるのはリオレイアの悲鳴。そして地に落ちる音。

強く地を蹴り、気を練り上げる。

？鉄刀【神楽】？を抜き取り、それを頭上で大きく円を描いた後、左斜めに振り下ろす一閃。力を振り絞り、強引に再び振り上げ右斜めに振り下ろす一閃。勢いをそのままに、の字に刀を振るう。

そして、太刀の必殺の一振り。

「はあああああああああああ！」

白銀の刀身が白い光を纏い始める。踏み込みざま、大きく身をよじり、一回転。

？気刃大回転斬り？。

先程とは違う、確かな手応え。これは 間違いなく斬った。

悲痛な声が辺りに響いた。閃光玉によるものとは違う、もっと悲痛なもの。散る血飛沫がそのダメージを物語る。

「焰っ！」

「任せて！」

そのままリリーは納刀し、離脱する。入れ違いになるよう今度は焰が懐に潜り込むと、双剣を打ち付け気合を込める。

気を高ぶらせ、己の力を解き放つ。

（ 鬼人化ッ！ ）

刀身が赤く光始めた。焰が？スノウツインズ？を振るう。鬼人の力を纏った双刃が無数の閃きを放つ。

幾重もの斬撃がリオレイアの鱗を、皮膚を、肉を抉っていく。

「これで……どうだっ！」

トドメの一撃。渾身の力で氷結の双刃を叩きつける。裂ける肉の感触に、確かな手応えを焰も得た。

そのまま滑るようにステップを刻んで一気に距離をとる。再びリオレイアを挟むような形となった。

倒れこんでいたりリオレイアが立ち上がる。息を潜めていた炎がちらちらと口からまた散り始めた。

体をしならせ、再びバインドボイス。耳を押さえて体が硬直する。二人は歯噛みした。

リオレイアが体を俊敏に反転させリリーに向き直る。攻撃が来ると分かっているにもすぐに動くことが出来ない。

大きく体を仰け反らせた。モーションが大きい。

（ 火球？ いや、動きが違う ）

ハンターとしての勘。しかし、初めてまみえる相手に、どんな攻撃が来るか分からない。

まず見えたのは火球。自分の勘が違ったのか？ 咄嗟に大きく跳んで回避を試みる。が

「な!？」

その火球が途中で炸裂した。

(爆発なんて　!)

「くああ!」

避けきれずに巻き込まれる。爆発の火炎と爆風で体が大きく吹き飛ばされた。

全身が焼ける痛みが引きつる。それでも受身をとるあたりは流石といったところか。

「リリー!」

「大丈夫だから!　前!」

焔が一瞬リリーに気を逸らす、即座にそれを一喝する。太刀は構えたままにざっと自分の体を一瞥すると、かなりのやけどを負っている。

(クルペッコ装備じゃなかったら確実に死んでたわよ、コレ)

自分が身につけていた装備に感謝する。ペッコ装備は一見、肌の露出が高く無防備に見えるが、その実極彩色の羽は緩衝性に優れ、火にも強い優秀な防具なのだ。

それでも今の攻撃はかなり効いた。次はない。

回復薬を塗ろうにも、リオレイアを前にしてはそんなことできる筈もない。リリーは地団太を踏む思いだった。

そろそろ閃光玉の効果もあまり期待できない。一瞬、怯ませることが出来てももって数秒であろう。

(リリーは実質戦闘不能ね……。立っているのがやっとって感じだし)

ぎりつと歯軋りをした。一対一じゃまず間違いなく勝てない。かといって、もう逃げることも叶わないだろう。

絶望的な状況だった。

ハンターが狩猟中に命を落とすことなんてしょっちゅうな話だ。

しかしその話に自分たちの名前が上がると思うとぞっとする。

(まだ……死にたくないし、死ねない。だけど……)
考える。まだシビレ罫はある。だが、あれを設置するにはどんなに短くても十数秒はかかる。

八方塞の状況。冷や汗が流れる。かくなる上は……

「リリーは先ず逃げて！」

「でも……」

「立ってるのがやつとでしょう！ 足手まとい！」

リリーがぐつと言葉を飲み込む。焔の言葉はもつともだった。彼女はすでに肩で息をしており、見るからに限界に近い。

？犠牲は一人で十分？。

どちらも死ぬよりも、どちらかが死に、どちらかがこいつを討伐するためにパーティを呼んだほうがはるかにいい。

「すぐに助けを呼ぶから……それまで耐えてっ！」

やがてリリーは逃げ出した。その決断の速さは確かに熟練を思わせる。リオレイアの意識はずっと焔を向いており、リリーの逃走に気づく気配はない。

仲間が助かるという安堵と自分が死ぬ恐怖。

？強がり？なんて言わなければよかった。そう思ったところでもう遅い。一人という状況が、さらに彼女を追い立てる。

(……いいわ。ぎりぎりまで足掻いてやるわよ！)

精々、気を強く持つ。それだけしか出来ない。

雄叫びとともに突進を仕掛けてくる。ぎりぎりまでリオレイアを引きつけ、横に大きく飛び込み前転。間一髪、突進をさける。

体を跳ね上げ、背後を見せるリオレイアに特攻する。足元に潜り込むと、素早く両腕を振るった。

一太刀、二太刀と連撃を入れる。

(狙うのは足だけっ！)

リオレイアの鱗は確かに強固だ。それでもずっと同じ箇所さえ斬っていれば、あるいは。

足に無数の傷が刻まれていく。リオレイアは数歩移動すると鬱陶しそうに尻尾を薙いだ。すれすれで再び足元に潜り込み、再度リオレイアの足を斬り刻む。

いつまでも纏わりつく焔を振り払うように宙へ逃げた。こうなっ
てしまつては焔にどうすることもできない。バックステップで距離
をとり、相手の出方を窺おうとする。

が、すぐさま距離を詰められる。こんな距離、リオレイアにはあ
つてないに等しい。

ホバリングしたまま焔の真上を位置取ると、大きく体を揺らした。
(今度は何!?)

空中からの攻撃まであるのか。未知の恐怖に焔は舌打ちした。前
転して回避。直後、背後に肝を冷やす風。

宙に浮いたまま一回転し、尻尾を振るつたのだ。そうと分ならず、
たちまち立ち上がつてリオレイアの方を向く。

眼前にあるのは大きく振るわれる強靱な新緑の尾。咄嗟に双剣を
交差させ、それを受けた。そうしてすぐに後悔。

(しまつ !?)

大きな衝撃に体が飛ぶ。そして自分より高い位置に舞っている物
を見て、焔は絶望した。手にあつたはずの剣がない。

くるくると宙を舞っているのは二本の愛刀。それも、華奢な刀身
は先の攻撃で刃が欠けていた。もともと、双剣は防御できるように
出来てない。折れずに済んだだけで幸運だった。

(あたしの? スノウツインズ? が!)

一本は地を滑つてさらに遠くへ転がったが、一本はすぐ傍の倒木
に突き刺さった。

受身を取り、すぐさま倒木に刺さった一本を回収。続いて自分よ
りさらに後方へ飛んだ愛刀を回収しようとするが、リオレイアはそ
れを許さない。

灼熱の火球が焔を襲つ。咄嗟にそれを避けるも、今度はリオレイ
ア自身が迫っている。

「無理だつて！」

悲鳴じみた怒声が空しく響く。衝撃を殺そうとバックステップをしようとすることも間に合わない。

直撃。

「かはっ

」

肺にある、全ての空気が吐き出される。どころか、ポーチまでもが自分の腰から飛んでいき、ばらばらと中身が散った。絶望を横目に、強く木に体を打ちつけ地に落ちる。

横隔膜がどうかしてしまったのか。息を吸おうにも詰まってしまつて吸い込めない。ぜえーぜえーと嫌な呼吸音が耳に障る。

（なんて、ザマ）

手元には何も無い。視界は点滅し、足腰には力が入らない。

（……リリーは、助かったかしら）

ぼんやりと仲間のことを考える。気の強い焰と気さくに付き合ってくれる、大切な仲間であり、信頼できるパートナー。

迫ってくるのは新緑の翼竜。ちろちろと口から零れる炎は激しさを増し、怒りは収まるどころか、さらに増しているようだった。

（死にたく、ないな……）

死は覚悟したはずだった。しかし、目の前の現実を直視した途端こうだ。

リオレイアが地を蹴る。死が、迫ってくる。

（本当に、なんてザマ）

恐怖からか悔しさからか、恐らくその両方だろう。ぼろぼろと涙が流れる。

激昂するリオレイアはもう目の前。その強靱な歯は、容赦なく焰の喉を噛み砕くだろう。

（死にたくないよ……！）

「助けっ……」

声すら出ない。むせて大きく咳き込む。

大きく口を開き、ぎらつく牙が見えたとき、焰はぎゅっと目を閉

じた。だから、見えない。

降りしきるは雷の矢。

矢の雨はピンポイントでリオレイアの頭部を襲う。堪らずにたじろみ、悲鳴を上げて焔の脇の大木に突っ込んだ。

そこで初めて、目を開ける。軋んだ音を立てて倒れる大木と、傍で倒れこむリオレイアを見て、目を白黒とさせる。一体、何が？

「これで貸し借りなし、かな？」

背後でする声に、一体どれだけ安堵したか。慌てて涙を拭う。

「……リリーとあたしを置いて、逃げたくせに。軟弱男」
振り向く。

その視線の先には、弓を構える天人の姿があった。

その天人は焔の声に苦い顔をする。

「……飛竜に、ちょっと嫌な思い出があつてね」

「嫌な思い出？」

オウム返しに尋ねるが、ふいつと視線が焔から流れるのを見てハッとなる。

リオレイアが起き上がっていた。先の攻撃で左目をやられたらしい。左目は閉ざされ、今はその右目だけがぎらぎらと光っている。

立ち上がると激痛が走った。悟られないよう、冷静に頬が歪むのを抑える。

「無理はしないでいいけど」

「む、無理なんか！」

叫んだだけで激痛。不意の痛みに我慢できず、たまらずにわき腹を押さえて苦悶の表情を浮かべる。

「ほら見る」

「うるさい」

頬を赤く染め、はにかみながら睨む。だが天人の視線はずっとリオレイアに注がれていた。自分が完全に気を緩めていることに気づき驚く。

リオレイアは新たな敵の出現に、こちらを窺っているだけで攻め入ってこない。

「俺が仕掛けるから、焰はその隙に自分の武器を」

「分かった」

流石に逃げろ、とは言ってこない。自分の身の程はしっかりとわかきまえているようだ。少しだけ、天人のことを見直す。

見れば、少しだけ震えていた。岩陰に隠れていたときのようにあからさまなものではないが、それでもはつきりと目に見えるほどには弓が揺れている。

「あんたこそ、無理しないほうがいいんじゃないの」

「泣いてた女の子には言われたくないな」

「~~~~ッ！ 言ってなさいッ」

軽口を叩き、二人は走り出した。天人はリオレイアを中心に円を描くように。焰は自分の得物を取りに。

終結

時は少し遡る。

森を走る。ただ、走る。

「ハツハツハツ！」

息が続かない。それでも、恐怖を振り払うように天人は走った。

新緑の翼竜が脳裏をよぎる。ちろちろと舞う火の粉。ぎらつく牙。鋭い爪。

突然、ずきりと完治したはずの右腕が痛む。思わずに持っていたものを手放すと、それは地を滑っていった。

「あ」

光を受けて？アルクセロジョーヌ？がきらきらと光る。足を止め、天人はそれを呆然と見やった。

意識していなかったが、どうやら納刀せずに持ったまま走っていたらしい。

鈍い動作でそれを拾い上げ、あたりを見回す。気づけば先ほどの水場へと戻ってきていた。ここからは見えないが、少し探せば倒したクルペッコが横たわっているだろう。

さわさわと流れる水をぼんやりと眺め、やがて大げさにそこに座り込んだ。さらには横になる。

自分は一体何をしているんだろう。自分を助けてくれた二人を置いて逃げて。

情けない。

「……ッ！」

強く水面を叩き付けた。激しい飛沫が自分の顔にまでかかる。誤

って吸い込んでしまい、大きくむせた。

起き上がって激しく咳き込む。暫くしてからようやく咳は収まった。

「……クソ」

誰に対するものなのか、天人にも分からない罵声。

あるいは、それは自分自身へ向けての言葉だったのかもしれない。時間だけが無為に過ぎていく。クエストは制限時間が設けられている。こんなことをしているぐらいなら、残り二匹のジャギイノスを狩ってしまった方がいい。

そう思い直して緩慢な動きで立ち上がると、ふと背後で何かの気配を感じた。

「……!!」

狙いをつけず、即座に振り返り矢を放つ。矢は途中で分裂し、拡散した。その内の一本がその何かへと鋭く迫る。

白い閃光が走る。

矢はその一太刀で真つ二つになり、その何かの脇に逸れていった。驚き、慌てて矢を引いたまま弓を構える。しかし、その矢が放たれることはなかった。

「いやぁ……お姉さんの目に狂いはなかったかな。こちらも見ないで、人間大の大きさの物に矢を当てるなんてね」

その声は、リオレイアを前に逃げると言った少女のもの。草木の茂みからゆらりとその姿を見せる。

「リリーさん！」

「あははは……ちょっと、私たちにはちょっと荷が重かったみたい。おかげでこのザマよ」

全身が火傷だらけだった。白魚のようだった白い肌は赤くただれ、綺麗だった金髪もところどころ焦げてしまっている。今の天人の攻撃で全ての力を使い切ったのか、愛刀の鉄刀【神楽】を地面に突き

刺し、杖のようにしてそれにもたれる。

慌てて駆け寄り肩を貸した。お礼を言う余裕すらないらしい、リリーは熱い息を吐くだけで、ほとんど天人にしなだれかかるような形になっている。

リオレイアにやられたのか　そう思い、天人は自分の愚かさを呪った。二人なら、大丈夫だと思っていたところがあつた。クルペッコ相手にほとんど無傷。それは新人の天人にしてみたら確かに凄いことだっただろう。しかし、クルペッコを何頭狩ったところで、リオレイアは格が違うのだ。対策もせずに初見でどうにかなる相手ではない。

そこまで考えて、ふと違和感を覚える。どうしてリリーしかない？　一緒に逃亡してきたのではなかったのか？　そしてそれが意味するところは

肩を貸していたリリーが突然、力をこめた。そうなると自然、リリーに抱きしめられるような形となる。装備ごしでも柔らかいものを感じ、思わず赤面するが、リリーの表情が真剣であるのを見て、天人も気を引き締める。

「何が、あつたんですか？」

「……まだあんまり経験のない、君にこんなことを、頼むのは、間違つてゐるって分かつてる」

お互いの吐息がお互いの顔にかかるぐらいの至近距離。だということに、ぎりぎり聞こえるか聞こえないかという声量。

リリーが天人の方を向いた。整った美貌が崩れ、今にも泣きそうな表情になっている。それだけ必死なのだ、天人にも分かった。

途絶え途絶えになりながらも、リリーは言う。

「焰を、助けて」

自分に注意をひきつける為に矢を放った。複数の矢が深々とリオレイアの翼に突き刺さり、体を雷撃が襲う。

だが相手は飛竜。それ如きじゃびくともしない。リオレイアは天人めがけて火球を放った。前転を二回連続してそれを避け、リオレイアの真横に位置すると抜き取った矢を再び放つ。

今度は拡散し、首から尻尾にかけて矢が刺さっていく。が、お構いなしにリオレイアは天人に突っ込んだ。

体がすくむ。だけど立ち止まることなんて出来ない。素早く弓をたたんで納刀すると、リオレイアがぶつかるぎりぎりのところで全力で前へ跳ぶ。ずさーっと地を滑り、少し皮膚が裂けたが、これぐらいなんてことはない。

すぐに起き上がり、再び弓を展開。こちらを振り向くと同時、強く引いた弦を放つ。

複数の矢が連続して飛んでいき、それら全てがリオレイアの顔に深々とささった。悲鳴をあげて二、三步と後ずさる。

それをみすみす見逃す天人ではない。大きく弓を引くと、それを天高く放った。曲射され、途中でばらけた矢はリオレイアの背に降り注ぐ。

「天人！」

背後から声がかかる。それだけで天人は大きく後退、すれ違いうにして焔がリオレイアへと突っ込んでいく。

手には？スノウツインズ？が握られている。刃こぼれは研がれてなくなっているが、その刀身は少しだけ歪んでいるようにも見えた。「バックアップする！ 無理はするな！」

「分かってる！ あんたも無茶は厳禁よ！」

リリーは素早くリオレイアの足元に潜り込むと、二つの剣を打ち

つけて気合をこめた。刀身が赤い光を帯び始める。

飛び散る鮮血すら凍らせる、赤い双刃。リオレイアは鬱陶しそうに尻尾を振るい、焔をなぎ払おうとするが、上手い具合にリオレイアの移動に合わせてステップを踏み、これに当たらない。

初めて見る鬼人化を横目に、天人はリオレイアを中心に大きく旋回しながら？ざっと周囲を確認しつつ？、時折曲射で焔を援護するやがて、リオレイアが宙へと逃げた。鬼人化を双剣を交差させるように振るって解除し、素早く後退。対照的に天人は接近し、離れようとするリオレイアから一定の距離を保つ。

弦の引き具合を調節し、拡散や連射を交えながら矢を放っていく天人にこんどは狙いを定めたらしい。ホバリングしたままの体勢で天人に近づき、大きく体を震わせた。

「避けて！」

焔が叫ぶのを聞いて、天人は反射的にバックステップ、そして横跳びをしてリオレイアの振り回された尻尾を避ける。離れた位置からも感じる風に天人の背に冷や汗が伝った。

体を宙で二回転させたりオレイアは、しかしそれでもしつこく天人を追跡、再び同じ動作を繰り返す。

「つなる！」

大きく前転し距離をとると、素早く弓を構えて矢を放つ。幾重にも突き刺さる雷の矢。ついに体に流れる電撃に耐えかね、リオレイアは悲鳴を上げて尻尾を振るう途中で地に落ちた。

「焔！」

「了解っ」

再び、入れ替わる。今度は焔がリオレイアの懐に潜り込み、天人が距離をとる。

自然と彼らは？スイッチ？と呼ばれるパーティならではのコンビネーションを成し遂げていた。

攻撃する者が前に出、それ以外の者は下がって次の攻撃に備える。

パーティのうちでの？切り替え？。

パーティのメンバー全員がモンスターの懐に潜り込んでしまうと、誤って味方同士で傷つけかねない。故に、初心者が組んだパーティでは基本的にスイッチを繰り返して戦うことが多い。

特に、太刀や大剣、双剣、スラッシュアックス、ガンランスなど振り回したり砲撃したりして使うタイプの武器を使う面子のいるパーティに多い。

双剣は一撃一撃の攻撃力は低いが、それを補えるだけの手数が多さが売りだ。しかし、それは逆に言えばそれだけ切れ味が落ちやすいということでもある。さらに、双剣の秘技である鬼人化はスタミナを激しく消耗する。

今回の場合は、スイッチした焰は天人が戦っている間に双剣を研いだり、鬼人化で消耗した体力を取り戻したりして次の戦闘に備えていた。

再び鬼人化し、地に伏せて悶えているリオレイアを切り刻んでいく。遠方からは弓の援護もあり、リオレイアの声も明らかに出現した当初に比べて覇気がない。

（ いける ）

焰はこの状況に、うつすらと絶望に希望を見出し始めていた。その現れに、口元には小さな笑みさえ浮かんでいる。

天人が来てから、一気に状況が好転した。

足元にいる味方には攻撃を当てず、常にリオレイアのみ矢が突き刺さるその技量。

何より、先ほどからは考えられないような勇ましさ。

押し引きの見極めも上手い。

（ これなら、いける！ ）

恐らく、リオレイアはもう瀕死の状態だろう。このままいけば、あるいは狩猟したモンスターリストにリオレイアの名前が刻まれるかもしれない。それは、ハンターにとっては大きな意味を持っている

た。

慢心しきつた焰はより一層激しく？スノウツインズ？を振るう。

そんな焰の様子を遠目に見て、天人はえもいわれぬ危機感を感じていた。

収まっていたはずの炎がまたリオレイアの口からちろちろと見え始めている。これは激昂している何よりの証拠だ。

「焰！ 引け！」

天人が声をかける。しかし、焰は恍惚とした表情のまま一心不乱に双剣を振るい続ける。

「大丈夫！ このまま」

不意にリオレイアが立ち上がり、焰の言葉が途切れた。全身を血にまみれさせたりリオレイアの迫力はより一層強まっており、一睨みされただけで焰は固まった。

普段なら余裕で反応できるような攻撃。しかし、焰は動けない。大木のような尻尾が振るわれ、焰の体を強く打った。握っていた双剣を再び落とし、無様に地を転がる。

「カハッ」

肺の空気を全て搾り出されたような感覚。肺に空気を送り込もうと大きく息をするも、上手く息が出来ない。

「焰っ！」

肩膝を突いて胸を押さえて苦しむ焰めがけて、リオレイアが大きく体をしならせた。焰も何とか、回避は確実に間に合わない。

コンマ一秒の思考。

駆け出す。同時、そのまま右手にあるもの　愛弓の？アルクセロジョー又？を思い切り投擲した。

放たれる火球は、その投げられたものに遮られ、爆ぜる。爆風はかなり強烈なものだったが、それでも焰がこてんと尻餅をつく程度

ぐらりと天人の体が揺れた。そのまま受身も取らずに地面に倒れこむ。

「ちよ！ どうしたのあんた!？」

最後に、焰が慌ててこちらにやってくるのが見えた。それを見て、微笑む。

そうして、天人は気を失った。

エピソード

目が覚めたら、そこには見慣れない光景が広がっていた。まだら模様の天井は、おそらくユクモの木のものだろう。

朝日が眩しい。思わず右手で目を覆い、光を遮った。今は……どうやら朝らしい。

ふとももの辺りに妙な違和感を覚え、天人はむくりと起き上がった。

「……！」

自分のふとももを枕の代わりにして、いすに座ったまま浴衣を着た焰が安らかな寝息を立てていた。出かけた声を何とか殺し、忙しなく周囲を見回す。

「ずっと付きつ切りだったのよ、天人くん」

「あ……」

「おはよう、天人くん」

「お、おはようございます」

少し間隔を空けて並んでいるベッドの上に、腕に包帯を巻いたりリリーが柔和に微笑んでいた。あれだけの火傷だったのだ。服に隠れて見えていないだけで、その腹部なども包帯で覆われているのは間違いなかった。

恐らく、ここはユクモ村の病院なのだろう、と天人は勝手に納得した。

包帯まみれのリリーの姿を見て、いたたまれない気持ちになる。自分が情けなかったから、リリーさんにこんな大怪我を覆わせてしまったと、自己嫌悪に陥る。

リリーはそんなしょんぼりとした天人を見て微笑みを少し困ったものに変えた。

「私のことなら気にすることないわ。天人くんを追い返したのは私なんだし」

「でも、俺があの時逃げてなければ……」

「それはそれで、結局全滅していた気もするけど？ 私」

「……………」

「だから、この結末でよかったのよ。結局、誰も死んでないもの。あまつさえ、リオレイアを討伐すらしてしまったんだから」

「……………そういえば」

「ここでようやく、天人は自分が成し遂げたことを思い出す。

あまりの現実味のなさに、そのことを失念してしまっていた。

(……………リオレイアを、やったのかあ)

「これで、私と焔、そして君にリオレイアを討伐したっていう記録が確かについたわ」

「おお……………やりましたね、リリーさん」

「そういうと、何故かリリーを目を丸くした。天人はリリーの反応にきよとんとする。

「やりましたねって……………天人くん、自分が成し遂げたようなものなのよ？ どうして他の人の手柄みたいに言うの？」

「え？ いや、だって……………まあ確かに止めを刺したのは俺かもしれないけど、それはリリーさんや焔……………さんがリオレイアを弱らせしてくれたから」

「それが、そんなこともないの」

天人の言葉を遮るようにしてリリーが言う。どういうことだ、と天人が眉をひそめた。

リリーは無自覚のうちにやっていたのか、と驚いたが、あくまで平然と天人に説明する。

「君の放った矢がとりわけ多く刺さっていた部分は、リオレイアの頭部、脚部、そして腹部よ。もちろん、翼や背中にも刺さっていたけど、割合的に言えば大したことない本数だったわ」

「はあ……………」

「モンスターには、それぞれ弱点があるの。鱗が他の部位に比べて

柔らかかったりしてね。君の矢が多く刺さっていたこれらの部分は、その弱点だったの」

「そりゃまあ、刺さりやすいなあと思っていた部分を狙ってましたからね。そこが恐らく弱点だろう、とは思ってましたけど」

「……え？」

矢の刺さり具合によって、どの部分が弱いか、どの部分が強いかを見極めていたのは事実だ。彼はこれを当然だと思ってたし、誰でも出来るもの、と勝手に思い込んでいた。

もちろん、そんなことを出来るのはある程度の経験を積んだハンターだけだ。

それをさも当然のように話す天人に、もはやリリーは驚きを通り越して呆れていた。

(……なんていうか、やっぱり天才っているのかしら)

はあ、とため息をつく。

「とにかく、リオレイアに与えたダメージの多くは君が与えたものなの。分かった？」

「別に、誰がダメージを多く与えたとか、どうでもいいんですけどね。結局、リリーさんと焰さんがいなかったら、俺は戦えなかったわけですし。最終的にあれですよ。うん、二人のおかげです」

屈託なく笑う天人。リリーはさらに目を丸くして、やがて力なく笑った。

そんな話し声で、焰もどうやら起きたらしい。がばつと頭を跳ね上げると、ぱちりと天人と視線が合った。

飛びつくようにして天人の両肩に手をかける。天人は驚いて身を引いた。

「ど、どうしたの？」

「どうしたの、じゃないわよ！ あんた、あたしがただ心配しただと」

「あらあら。焰ってば、心配してたんだー。そりゃそうよね、あれ

だけ狼狽して泣きじゃくってたんだから」

にやにやと意地悪な笑みを浮かべ、リリーが横槍を入れる。

な、と一瞬口ごもり、そうして顔を真っ赤にして焰はリオレイアのごとく激昂した。

「し、ししし心配なんてしてない！ 狼狽してない！ 泣いてもない！ か、勝手なことを言わないでリリー！！」

「あれー？ たった今、焰は天人くんに向かって『心配した』ってはっきり言ったよー？ ねー天人くん？」

蠱惑的な笑みで言うリリーに思わず赤面し、曖昧に返事を返す。

それを見ている焰は面白くない。怒りはさらに激しさを増し、天人はそんな焰を見て本当に火を吐くんじゃないかと思った。

そんな様子を楽しげに眺めるリリーをちらりと見やって、焰を少しだけ哀れに思う。

天人が焰をなだめ、怒りが収まるのを待つて　ちなみに十数分ほど要した　リリーは徐に口を開いた。

「じゃああのクエストの報告をするね。まず、抜け落ちた情報に関して」

「……………」

間違はなく、あれは意図的に隠していただろう。リスクが高いほどクエストのランクも上がる。それと比例するように、報酬金額も上がる。小さな村に住む一般人がクエストを依頼する場合、こういったケースは少なくない。巨額の報酬を払うことが出来ないからだ。そして、その結果死に至ったハンターもまた、少なくなかった。

「まあ、案の定というかなんとというか、リオレイアの情報を書き足すとしても報酬金額が払えなくなってしまうから、というものでした。あ、賠償金としてだけど、一応報奨金はでるらしいから、そこら辺は安心していいってコノハさん言ってたよ」

「はあ……………まあ分かっちゃいたけど、依頼人はハンターのこと死んでもいいとも思ってると思えないわよね、全く」

「あーそういえば結局ジャギイノス倒してないや……」

間の抜けた天人の声に呆れたように焰がため息を吐く。

「あんた……命落としかけたのよ？ 分かってる？」

「それでも、やっぱりさ。初めてのクエストぐらい、成功させたかったなっていうか」

焰はそこで目を丸くした。同様の反応をリリーも見せる。

「初めて……？ 本当に、初めてのクエストなの？」

「え？ いや、まあそうだけど……」

「それであの腕って……おかしくない？ なんであんな正確に狙いを定められるのよ」

「初めてのクエストでクルペッコにリオレイアと戦闘……しかもその二匹を討伐……はあ。やっぱり天才つているのね……」

二人して頭を抑える。天人はすごく居心地が悪い。

「いや、でも間違いないくりりーさんと焰がいなかったら死んでましたよ」

「それでも、よ。ねえねえ、どうやって腕磨いたの？」

好奇心をむき出しにして尋ねてくるリリー。焰も興味があるようで、その視線は天人から外れない。

天人本人としては、大した特訓なんてしていなかったたので、二人の期待は少々荷が重かった。

「別に何もしてないですよ。故郷でケルビ狩りしてただけです」

「……何年間ぐらい？」

「何年……五年ぐらい、でしょうか？」

納得、といわんばかりに頷く二人。

ケルビは比較的穏やかな草食モンスターだ。似たようなモンスターに北のほうに住むガウシカがいるが、こちらはケルビに比べてやや大きく攻撃的である。

小型で俊敏なケルビを狙うのは大型モンスターを狙うよりも難しい。初心者弓使いもまずこのモンスターを狩ることで扱いに慣れるのが一般的だ。

そんな基礎訓練を五年も積んでいたとあれば、あの正確な狙いも納得がいくというものだ。

「それだけ長い間ケルビ狩り続けてれば、そりゃあ上手くもなるわよね」

「ケルビだけじゃないですよ。ブナハブラなんかも狩ってました。

ブナハの素材はあまり市場に出回らないから、意外に需要あるんですよね」

「……………」

ブナハブラは昆虫型のモンスターである。大きさはケルビよりさらに一回り小さく、尚且つ空をちょこまかと飛ぶので、ケルビよりも遙かに狙いにくい。

二人は頭を抑える。関心も一回りして呆れてしまったようだった。彼の才能はどうやらそれ相応の努力も相まって結果を出していたらしい。

「そういえば、ブナハブラといえば……………天人くんの武器の？アルクセロジョー又？なんだけど……………」

「う……………」

「あー。そういえば」

焔が思わずうめく。言われて初めて天人は思い出した。焔を火球から守るために、思い切り投げつけた拳句、爆砕されたのだ。

言いずらそうな様子なりりーとうなだれる焔を見て、なんとなく天人は自分の愛弓がどうなったのか悟る。

「やっぱり、ダメでしたか……………」

「ごめんね。一応、ギルドの人が残骸を拾い集めてくれはしたみたいだけど……………」

木箱を渡され、その中身が開かれる。そこには、すすこけた虫の羽やら金属片やらが転がっているだけ。

元々、壊れるのを承知で投げつけたのだから、後悔こそしていないものの、こうしてばらばらになった愛弓を見ると少しだけやるせ

なさが心に残る。

「……ごめん。あたしが、天人の言うこと無視して先走ったから……」

「気にすんなって。壊れたら、また新しいのを作ってもらえばいいさ」

そう言う天人の気丈さを見て、さらに落ち込む焔。

確かに、素材さえあれば同じ武器は作ることは出来る。しかし、それは厳密に言えば同じでは決していないのだ。

二度と同じ絵が書けないように。二度と同じ武器が出来ることはない。微妙なクセはもちろん、使い込めば弦の強度は変わってくる。使い手に馴染んでくるのだ。

ハンターの間では、これは常識だ。武器は自分の分身だと言うハンターさえいる。

しょんぼりと肩を落とす焔をどう元氣付けようか悩んでいる時、リリーがうつすらと笑っていることに気づいた。

「どうかしたんですか？」

「うん。実は、天人くんの弓の件なだけどね」

そう言っ、がさがさと袋から何かを取り出すリリー。二人は互いに見合って首をかしげた。

じゃーんと言ってリリーが掲げたそれを見たとき、二人は揃って声を上げた。

「ど、どうしたのそれ!」

「これ……リオレイアの弓、ですよね……?」

「?クイーンブラスター??。私たちと天人くんが討伐したりオレイアの素材を使っ作ってもらいました。あ、もちろん制作費は私たちもちだから心配しないでね」

はい、と差し出される?クイーンブラスター??を天人はじつと見つめる。そして目だけはららんと輝かせたまま、首を振った。

それが拒絶の意味だというのは言うまでもない。リリーと焔は眉を潜める。

「どうして受け取らないのよ。これで武器の件はチャラよチャラ」
「受け取れないよ。だって、それは俺の分の剥ぎ取り素材だけじゃなくて、リリーさんや焔の素材も使われてるんだ」

「焔の命に比べたら軽いわ。救ってくれたお礼なんだから、受け取っちゃいなさいって」

「……いや、やっぱり受け取れません」

少しの逡巡と、拒絶。リリーはうーんと悩む。焔はそんな天人にイライラとし始める。

やがて、何か思いついたようにリリーの顔が華やいだ。

「じゃあ、天人くんはこれで私たちに貸しを作ったってことにしましょう。素材は後で返してもらっわ」

「……？ どういう」

はっとしたように焔は口を閉ざしてリリーの顔を見やる。頷くりリーを見て、にやっと不適に笑った。

二人で勝手に納得している様子をじーっと見て、なにやら嫌な予感。しかし、その予感は外れる。

「天人くんには、私たちのパーティに加わってもらいます」

「……………は？」

ぽかんと口を開け、なんとも間の抜けた声を出す。

リリーと焔はというと、顔を見合わせてとても楽しそうに笑っていた。

「どういうこと？」

「どうもこうもないわ。要するにあんたはあたしたちのパーティに入るってこと。何か問題ある？」

「いや、俺の方はぜんぜんいいけど……いい、の？」

「大歓迎よ。私たち、ちょうどいい腕を持ったガンナー探していたところだし。私たち二人だと、どうしても穴が出来ちゃうのよね」

「で、でも、俺まだ完全に飛竜に対する恐怖心が拭えたわけじゃな

いですよ？ 今回だって最終的に気絶しましたし……」

「それはあたしたち全員でなんとかする。？パーティの問題？なんだから」

パーティの問題。

そう言ってもらえたことが、ぐっと心に響く。

「決めるのは君だよ、天人くん。私たちのパーティに参加するかしないか、全ての決定権は君にある」

「クイーンブラスター？？が差し出されて、参加の意向を問われる。」

「……………」

ユクモ村に来て、まだ一週間も経っていない。だというのに、こんなにも自分を買ってくれる人がいるということが天人は嬉しかった。

何より、自分を心配してくれて、信頼してくれる仲間が。

「……………これぐらいの貸し、すぐに返してやりますよ」

そして、天人はその？クイーンブラスター？？を手に取った。リリーが微笑み、焰が満面の笑みを浮かべる。

「これからよろしく。今更な感じがするけど、俺は凍月天人。年は十八。使用する武器は弓だ」

天人が手を差し出し、握手を求める。

「東雲焰よ。年は十七。双剣使い。パーティに参加するのはいいけど、足だけは引っ張らないでよね」

「リリー・アイスバーン、十九歳。使う武器は太刀だよ。一応、パーティのリーダーやっています。よろしくね」

焰がその手を取ろうとした時、ふっとリリーが割り込んだ。柔らかい微笑を向けられて、慣れてない天人は赤面する。

むきになって焰がリリーの手を強引に振り払い、天人と握手する。しかも、そっぽを向いたまま。天人はよく分からずに苦笑いのまま

首を少しだけ傾けた。

「あらあら。焔？　あなた、私が握手するのを待つことも出来ないの？」

声になしに棘がある気がした。

「リリーが割り込んだんでしょうが」

「順番なんて誰が決めたの？　先に手をとったのは私よ？」

「流れるにあたしが最初だったでしょっ」

「ふーん？　何々。つまり天人くんの手をいち早く取りたかったの

ね」焔は。そうと言ってくれれば一番譲ったのに」

「な、何言ってるのよ！　そんなわけないでしょ！」

「なら問題ないじゃない」

「うーうー！！」

「あ、あの……ここ病院ですよ……？　もう少し静かに……」

こうして、天人の狩猟生活は好スタートを切ったのだった。

足りない要員（前書き）

どうも、綿雪ましろです。

気になって覗いて見たらユニークアクセスの伸びが思った以上に良かったので不定期亀更新でこれからも続けようと思い、こうして続編を投稿させていただきました。

かなりの低速更新になるとは思いますが、今後ともよろしくお願いいたします。

足りない要員

照りつける日差しに、意識が朦朧とする。最後のクーラードリンクの冷却効果がどうやら切れたらしい。

「ハッハッハ」

小刻みに息を吸う。足が鉛のように重い。命を守る防具すら鬱陶しくなってくる。

()

体がふらりと揺れる。

「あともうちよつとだよ！ 頑張つて天人くん！」

「ここが正念場よ！ 根性見せなさいっ」

途切れそうになる天人の意識を二人の声が何とかつないだ。そうだ。何も頑張っているのは一人だけではない。リリーも焰も苦しいに決まってる。

倒れそうになるのを何とか踏ん張り、鋭い相貌で弱りきった敵を睨む。

土砂竜、ボルボロス。乾燥地帯の泥沼に住み、体に泥を纏うことで日照りから身を守るといふ獣竜種だ。

餌であるオルタロスの蟻塚は長い間日照りに晒されてレンガのように硬くなっている。それを突き崩すために発達した頭殻が特徴的なモンスターだ。

その発達した頭殻を活かした突進攻撃は、単調な攻撃ではあるが非常に危険で、受ければ骨の数本は持つていかれかねない。もちろん、そうなってしまうえば戦闘は不可能だ。

他にも、外敵 縄張り争いをする大型モンスター、そして言うまでもなくハンターもこれに含まれる から身を守るため、体に纏った土砂を飛ばして攻撃してくる。これも非常に厄介で、ボルボロスの体液と混ぜた泥は粘着性が強く、一度ハンターに着くとな

かなかはがれない。防具が重くなり、それだけハンターにかかる負担が大きくなる。その結果、移動速度の低下を招き、突進を受けやすくなる。

ただ、乾燥さえすればポロポロと剥がれるので、ずっと泥を身に纏ったまま、ということにはならないのだが。

既にお互いに満身創痍。定められたリミットも近い。弱音を吐いてなんていらなかった。

ルドロス装備一式に身を包んだ天人はボルボロスの真正面に捉えられないように走りながら愛弓、？クイーンブラスター？？を再び展開する。

これが最後。そう言わんばかりにボルボロスが雄叫びを上げた。同時に突進のモーションに入る。

灼熱の大地を疾駆するその体には、三人のハンターに囲まれて無数の裂傷と刺傷があり、さらには数え切れないほどの矢が突き刺さっている。

リリーが斬り払いで、焔がステップで同時にボルボロスの足元から離脱する。結果として視界に入るのは天人となり、ボルボロスは彼を目掛けて猛然と走ってくる。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおお！」

揺れる意識を繋ぎとめるために咆哮し、全力で走る。その姿をボルボロスが追う。その巨軀と交錯する寸前、大きく飛び込むようにして前転、回避すると素早く身をよじって反転させる。同時に弓を引き絞り、思い切り天へと放った。

「な！？」

「はあ！？」

天人のとんでもない芸当にリリーと焔が仰天する。

ボルボロスが止まるであろうそのポイントを狙っての曲射。並みのハンターがやったとしても、決して当たらないような無謀な攻撃

だ。しかし、彼は決して並みのハンターと呼ぶにはかけ離れた技術を持っていた。

ボルボロスが足を止めたその地点に、矢の雨が降る。重力に引かれた矢は次々とボルボロスの甲殻を穿ち、突き刺さっていった。ぐらりと巨体が揺れる。一瞬後、砂煙を上げてボルボロスは倒れた。ぴくぴくと数度痙攣した後、完全に動きを止める。

「……ボルボロス、狩猟完了」

二人の方へと振り向いて、へにやりとした笑顔で天人は言った。

「かんぱーい！」

ユクモ村のとある酒場で三つのグラスが軽快な音を鳴らす。三人ともそのままぐいぐいと豪快にドリンクを飲み干した。

ユクモ名物、？採酒？。アルコール度数が低めな甘酒の一種で、ジューズ感覚で飲めるのが評判だ。もちろん、もっと強い酒もありはするが、そんなものを飲んでは話し合いが出来ない。

三人は狩猟の後、決まって反省会を開いていた。元々は駆け出しだった頃のリリーと焰がクエスト失敗を無くすために行っていたものだが、今となってはすっかりと習慣になっており、クエストが成功しようと失敗しようとして開くようになっていた。それは天人がパーティに加入しても変わらずに続いていた。

ちなみに、三人とも姿は浴衣である。

「つくうー。狩猟後の一杯は格別に美味しいわ。このために狩猟してる、あたし」

「大げさすぎよ、焰」

恍惚とした表情で言う焔に苦笑してリリーが突っ込む。一瞬でむつとなる焔を、同じく苦笑した天人がフォローする。

「まあ言いたいことは分かる気がするよ」

「でしょう！ 流石天人。話が分かるわね」

「なーにを言ってるのよ。あなたが怒るのを防ぐために話を合わせているだけよ。なー？」

「なー、って言われても……」

「ふーん？ 否定はしないんだ？ 結局あんたもあたしを怒らせないために話を合わせてただけなんだ」

「……………」

「こら焔。天人くんを困らせないの。黙り込んでしまったじゃない」

せつかくのフォローを台無しにしたのはリリーであるにも関わらず、この言い草である。天人は辟易した。

「リリーさんも焔をからかうのは止めてください……最終的に俺が焔をなだめることになるんだから」

「あらー。それが楽しいんじゃないの」

「……………」

満面の笑みでそんな暴言を吐くリリーに、天人は今度こそ絶句した。焔の方は慣れているのか、不機嫌そうにそっぽを向く。

「止めておきなさい、天人。リリーは性根捻じ曲がってるから注意したところで無駄よ」

「性根捻じ曲がってるって……言ってくれるわね、焔」

「あら？ 事実でしょう？」

挑発的に言う焔に対し、リリーがとった行動は、

「うわーん！ 焔が酷いこと言うー！！」

「っ！！」

「な！？」

わざとらしく泣いたフリをして天人の腕にしがみつく、というもなかった。咄嗟のことに天人は対応できず、そのまま左腕を許してしまっ。

焰が目に見えて紅潮した。直後、慌てて席を立ちリリーを天人から振りほどきにかかる。

「は、な、し、な、さ、い！」

「嫌だよー。絶対話さないもんねー」

「いだだだだだだ！ 二人とも痛い！ 痛いから！」

またやってるよあのハーレムビギナー、と天人にとってとても不名誉なことが周囲から苦笑気味に聞こえてくる。ただ、ヒートアップしている二人の耳には入ってこないようで、全く力を緩める気配がない。むしろどんどん強くなってきている。

しかも、夢中になってしがみつくりリーの柔らかい部分が押し付けられて天人は余計に慌てる。

「えっへへー。羨ましいでしょー焰。右腕なら空いてるよー？」

「リ、リリーさん！？ 酔ってませんか！？ って焰もリリーさんの言うこと真に受けてこっち見てないで解くの手伝ってくれよ！」

「べ、別にあんたの右腕なんて見てないわよ！」

「そこまで言っていないぞ！」

「っ！？ は、謀ったわね！」

「もう……焰も素直になればいいのに。そんなだと私、本気で天人くん貰っちゃうわよ？」

「な、な、何を言ってるのよりリー！」

「そ、そうですねよりリーさん。心臓に悪いんでそういう冗談は止めてください」

天人は既に二人から好意を持たれていることはなんとなく知っている。というか、こんな感じで積極的にアピールしてくるのだから気づかない方がおかしいというものだった。

心臓に悪いのはリリーの発言そのものではなく、嫉妬の念が込められた周りの男からの視線である。ちらりを周囲を窺えば、殺意すら籠っているような目で天人の方を見ている男性客が数人。

天人は今のを見なかったことにして、いろいろなものに冷や汗を

流しつつもなんとか場を收拾しようと努めた。

「今日の反省会をするんですね？ 雑談もこれぐらいにして、さつさと本題に入りましょう。ほら、二人とも席について」

天人に促され、しぶしぶとした様子で二人とも席に着く。普段こそ普通の少女となんら変わらない(?)二人だが、ハンターとしての意識は高く、狩りに関するなんらかの話題を出せば真面目に話しに応じる。そのことを天人はこの一月で理解していた。

「反省するほど危なかったかな、今回」

「まあ、危なげなく、と言っても過言ではない狩りだったわよね。

最後の天人の蛮行にはかなり驚いたけど」

「蛮行って……一応ちゃんと当てたじゃないか」

「だからってあんな無茶なこと、普通のハンターならやらないわよ。ボルボロスの突進は確かにこちらを狙って来るけど、速度の関係で大して曲がれないんだからもつと大きく距離とるように走りなさいよ。なんであんなギリギリのところまで避けようとするのよ」

「いや、あれは距離を測ってたから……」

「……………」

「なんていうか、もう天人くんには呆れて何も言えないわ……………」

焰が言葉を失い、リリーが頭を押さえてうめくように呟く。天人は二人の反応を見て、気まずそうに視線を逸らし頬を掻く。

このようなりとりも既に何度も繰り返している。今更もうリリーも焰も天人の規格外の才能に、出会ったばかりの頃のように大げさに驚いたりしなかった。

「まあ、天人くんのスペックが異常なことは今に始まったことじゃないし、それは置いておくとして」

「そろそろ打撃系統の武器を扱える人がパーティに欲しいわね」

「そうだね。ボルボロスの頭殻、硬くて二人とも弾かれてたし」

近接武器の系統には二種類ある。一つはリリーと焰の扱う太刀や双剣が持つ？切断？。もう一つはハンマーと狩猟笛が持つ？打撃？

だ。

二つの系統の違いは聞いての通りである。切断の系統を持つ武器はモンスター斬りつけてダメージを与えていく。対して打撃はモンスターを殴りつけてダメージを与える。

この二つの系統にはしかし、それだけではない大きな違いがある。切断の系統はモンスターが巨大な尻尾を持つ場合に限り、それを切断することが可能なのだ。打撃系統にももちろんこのような芸当は出来ない。

この系統は近接武器の大半を占める。片手剣に始まり、大剣、太刀、ランス、双剣、ガンランス、スラッシュアックス。さらには最新技術によつて開発された？斬裂弾？という特殊な弾丸を使用することでボウガンでもこの系統の攻撃をすることが出来る。

一方の打撃はモンスターに眩暈を起こさせることが出来る上に、疲労を加速させる効果があることも最近の研究で明らかになっている。これは切断の系統にはない効果で、メンバーに一人は打撃要員が欲しいとされる所以でもある。また、切断系統の攻撃に比べて遥かに弾かれにくく、隙が出来にくいことも違いの一つだ。

この系統を持つ武器はハンマーと狩猟笛が主に上げられる。扱い方によつては大剣やランスでもこの系統の攻撃が出来るが、あまり一般的ではない。実は弓の？曲射？も打撃に分類される攻撃で、モンスターのスタミナを大きく奪う。うまく頭に当てれば眩暈を起こさせる事だつて可能だ。斬裂弾と同時期に開発された？滅気弾？によるボウガンの攻撃でも同様だ。

現在、天人達のパーティにはこの打撃要員がない。天人の弓による曲射があるので全く皆無、というわけではないが、無論曲射だけ使い続けるというわけにもいかない。

前々から引き入れようという話は上がっていたのだが、今までのモンスターの肉質は比較的軟らかく、リオレイアは除いていなくても大して問題なかった。なので真剣には考えてこなかった。

だが、いよいよ特定部位とはいえ刃が通らない敵が出てきて、真剣に考えないわけにもいなくなってきた、というわけである。

「かといつてさ、どうしようもないわよね……。そんな簡単にパーティに引き入れられたら、あたし達今頃四人でパーティ組んでるはずだし」

「最初からそんなこといつてたら始まらないでしょ。弱音吐く前に何か考えを出しなさいよ」

「それはそうだけどさ……。だけど現実問題として入ってくれそうなハンマー使い、ないし笛使いなんて思い浮かばないんだけど？」

「……………」

現在、ユクモ村には約四十名ほどのハンターがいる。ロックラックの街のようなハンターの街ならいざ知らず、それぐらいの数であればほとんどのハンターが顔見知り、というのもさほど珍しいことではあるまい。

焰の言うとおり、彼女達が思いつく限りで？全ての条件？を満たすハンターはこのユクモ村にはいなかった。

天人はユクモ村に来たばかりなので、こういうことはよく分からない。ただ二人の話を聞いているだけで、特に意見を述べたりはしなかった。

「そうね。確かに考えても始まらなさそうだし、とりあえず手当たり次第ソロの使い手に声かけていこっか」

そういうリリーの表情は普段のような明るい笑顔ではない。取り繕ったような作り笑いだった。

付き合いが長く事情も通じている焰には分かったが、天人にはそんなことまで分からず、いつもの笑顔で了解と首肯する。そんな無邪気にも見える天人の様子を見て、リリーと焰は気まずそうに顔を逸らした。

ユクモ村にいるハンターの内の約八割はパーティを組んで活動し

ている。元々ソロで狩りをするハンターの方が異端なのだ。

確かにパーティでクエストを受ければその報酬は均等に振り分けられ、ソロで受けるよりも一人当たりの金額は安くなり、はするものの、その分狩猟の効率上がる。結果的に受注できるクエストの数が増えるのでソロで狩るのと同程度には稼ぐことが出来るのだ。

その上、ソロで狩るよりもその危険度は大幅に下がる。モンスターのターゲットがパーティの人数だけまばらになるからだ。

では、パーティの人数が多ければ多いほどいいのではないかという疑問が浮上するが、これもそうではない。パーティは原則として四人までと決まっている。

報酬を分ける上である程度の額を得ることの出来る最高の人数であるという理由もあるし、古くからのしきたりでもあった。

パーティを組んでいない残りの二割は、パーティ内で問題。例えば、狩猟の方向性が合わない、報酬の振り分けかたが気に入らないなど。が発生し、その結果としてソロで狩りをしたほうがいいという結論に至ったハンターがほとんど。

そうなってくると必然的に新米ハンターにメンバー加入を考えるパーティは目をつける。一月ほど受けるクエストの内容や量をチェックし、実力があるようだと思判断されたら勧誘する、という流れが一般的だ。実力が認められなかったハンターの大多数は基本的にハンターという過酷な職業を辞めていく。ハンターとは花形の職であると同時にかなり残酷な職でもあるのだ。生き残るために優秀な種だけが残る。完全な実力社会。

その点、天人は例外と言えた。この場合、天人よりも優秀なガンナーを引き入れることが出来たりリリーと焰の方が見方によっては天人よりも幸運だったのかもしれない。

そしてその新米ハンターの数は決して多くない。精々数ヶ月に一人や二人出てくる程度だ。また、その新米ハンターが現れたとしてもお目当ての要員じゃなかったり、実力がなかったりしたら意味がない。加えて、他パーティとの競争もある。

こういつた理由で、パーティ勧誘が難航することがリリーと焔には経験上、分かっている。そもそも、天人が入る以前二人で狩りをしてきたのもそれが理由である。入れたくても入れられない。そんな現状がユクモ村にはあった。

そしてもう一つ。彼女達にはどうしても譲れない条件があった。

「それじゃあ、とりあえず明日から手当たり次第ハンマーか笛使いに声をかけてみますね」

「それなだけどね。あの、天人くん。一つお願いがあるんだけど……」

リリーがこうやってはつきりと言わないのは珍しい。現状を知るリリー達からしてみれば、それは単なるわがままだという自覚が少なからずあったため、知らず知らずのうちにこんな話し方になってしまっていた。

「なんですか？」

「男のハンターは勧誘しないで」

言いづらそうにするリリーに代わって焔が素っ気無く答える。

「……え？」

「だから、男のハンターは勧誘するなって言ってるの。あんたはもうあたし達のパーティに加入してるって知られてるんだから」

「ど、どうして」

「不埒な考え持って入ろうとする輩を入れないようにするためよ」

「昔、ちよつといるいとあったのよ」

仏頂面で不機嫌そうに答える焔の説明をリリーが苦笑いで補足する。

曰く、リリーと焔は一時期、三人でパーティを組んでいたことがあった。もう一人のメンバーはハンマー使いの男で、実力は確かなものだった。

ただ、女癖が悪く、度々リリーと焔にセクハラじみたことをしてきたためにあっさりと罷免。それ以来、男性のハンターを信用して

いない、と。

そんな話を聞いた天人が途端に渋面になる。

「もしかして俺もあんまり歓迎されてません？」

「あんたは別よっ！」

「そんなことはないわ！」

ほとんど同時に焰とリリーが叫んだ。数秒の間微妙な空気が流れるも、リリーの咳払いでそんな空気も一蹴される。

「とまあ、とりあえずそんな訳だから、勧誘は女性ハンターだけで「分かりました……」

男のハンターに優先的に声をかけようと思っていた天人は少々元気なく答える。この今にも後ろから刺されそうな状況を変えられないと、しかももしかしたらより悪くなるかもしれないと思うと天人は気が重かった。

その後、多少の雑談も交えながら反省会を終えた三人は解散した。かくして、狩猟とはまた違う、しかしかなり手強い戦いに天人は臨むのだった。

足りない要員（後書き）

次回は10月22日（土）午前9時に投稿予定です。

相変わらずの駄文なので期待せずに待っていてください。

想像以上の難題

ボルボロスを狩った翌日、天人の姿はギルド内にある酒場にあった。もちろん、昨日話し合って決めた打撃要員勧誘のためだ。ちなみに、リリーと焔は昨日のボルボロスの報酬で金銭面に都合がつけられ、武器の強化をしに工房に向かったためこの場にいなかった。

時刻は既にお昼過ぎ。夜は賑わう酒場も昼は閑散としている。

朝から四時間ほど待ってみて、天人はようやくいかに自分達が難しいことをしようとしているのか理解し始めた。

ハンマーが狩猟笛を扱う、ソロで、女性のハンターをずっと探していたが、全く見かけない。今朝から見張っていたが、ギルドに訪れたのはパーティが二つだけ。

ユクモ村はロックラックのようなハンターの街というわけではない。自然、ハンターの数も限られる。そもそも、彼はこの村に一体何人のハンターがいるのかということさえ知らなかった。

昨日のリリーと焔の罰の悪そうな顔を思いだす。

(大変だつて分かってたんだろうな、二人とも……)

小さなため息を一つこぼすと、ぐうと腹の虫も鳴った。もう昼過ぎであることによりやく気づいた天人は注文を頼もうとしてはつたくなる。

財布の中を見ると、お昼らしいお昼を取れそうな金額は入ってなかった。家に帰ってお金を取りにいこうか悩むも、その間に条件を満たすハンターが来たらどうしようという懸念がそれを許そうとしない。

しばらく葛藤した後、結局彼はかなり軽い昼食　ガーグアのから揚げ五つのみ　を取って見張りを続けることにした。

ウェイターを呼んで注文し終わると、ウェイターは恭しく一礼し

た後に厨房へと入っていく。そんなウェイターの後姿を意味もなく目で追っている、背後から声がかかった。

「お隣いいですか？」

「っおお！ びっくりした」

びくつと後ろを向いてみれば、悪戯が成功した子供のように笑うコノハと、そんな妹の様子を見て額を押さえているササユの美人姉妹が立っていた。恐らく休憩時間に入ったのだろう。

どうぞと天人がやや疲れ気味な笑顔で言うとコノハとササユが上品に天人の正面に座った。

受付嬢のコノハとササユは、基本的に二人一緒に仕事をしている。双子の姉妹らしく、明るく元気な方がコノハ、クールで落ち着きのある方がササユだ。

天人はこの一月で二人ともある程度の間係を築いていた。少なくともこうして話す程度には仲がいい。

二人はささつと注文をしまつと改めて天人のほうへと向き直る。

「ごめんなさい。うちの妹は落ち着きがなくて……」

「何を言ってるの姉さん。ちよつと悪戯しただけよ？ ね、天人さん」

「まあ、そうですね」

「そういうところが落ち着きがないって言ってるのよ」

ちよつとした悪戯をするコノハとそれを注意するササユ。二人のやりとりを見て、なんとなくリリーと焰を思い出す。

コノハがリリー、ササユが焰、というポジションだろうか？ それもなんか違う気がして、天人は首をかしげた。一体どこが似ているのかが分からない。

「どうかなさいましたか？」

「あ、いや。ちよつと考え事をしていただけです」

「どっちが受けでどっちが攻めか、ということですか？」

「コノハっ！」

「きゃー」

珍しく声を荒げるササユから身を守るように両腕で頭を隠す。微笑ましいやりとりに思わず頬が緩む。

ササユがため息を吐いてからコノハを叱ろうと口を開いたと同時に、注文した品がやってくる。コノハとササユの前にはうどんが、天人の前にはから揚げがそれぞれおかれる。お腹を減らしていたよ
うで、コノハは姉そっちのけでいただきますと行ってから箸に手をつけた。なんとなく怒る気が削がれたササユは天人に頭を下げる。
「すみません、騒がしくて……」

「いや、うちのパーティも似たようなものなんでこれぐらいは」

「うふふふ。美少女ハンター二人に囲まれてその言い草はないんじゃないですか？ 満更でもないくせに騒がしいなんてー」

「いや、周囲の視線がかなり怖くて正直キツイと感じることのほうが……」

「それはまあ、あのお二人と親しくしていた男性なんて今までいませんでしたから。リリーさんも焰さんも、男性恐怖症とまでは行きませんが、ある程度の距離を常に保っていましたし」

「まあ、私もあんな執拗にセクハラ受けてたら嫌にもなると思いますけどね。その点天人さんは奥手そうだし、二人も安心なんじゃないですかね？」

「安心だからといってあそこまで、その、なんというか……」

「ベタベタされたら困る、ですか？」

ササユが微笑んでなんとかオブラートに包もうとする天人に助け舟を出す。天人は苦笑してはいと頷いた。

「ですよねっ！ 二人とも美人だし、あんなにされて平気なはずないですよねっ。で、どこまで行ったんですか？」

「どこまでって……」

「コノハ。いい加減になさい」

ササユの声のトーンが下がる。コノハはちろりと可愛らしく舌を出した。全く反省の色が見えない妹に姉はため息を吐く。

「本当に、すいません……」

「いやいや。一人でずっと暇だったから、話し相手が出来て楽しいぐらいですよ」

「そういえば、朝からずっとここにいましたよね？ 何してたんですか？」

「あー。実は……」

天人が簡単に事情を説明すると、二人は納得したように頷いた。ユクモ村のハンター事情に詳しい二人は今後の天人の苦勞を思い、揃って苦笑しく笑う。

「それで、条件満たす人、ユクモ村にどれくらいいますかね？」

「んー。どれくらいだっけ？ 姉さん」

「確か……二人？」

「二人……。絶望的ですわね」

ユクモ村に住むハンターが四十人程度だから、実際には五パーセントも条件を満たす人がいたという計算にはなるものの、やはり数だけ聞くと少ない。

天人はリリーと焰が既にこの事情を知っていたことを確信した。

「これ、かなり厳しいですよわね」

「そうですね。正直に言いますと、不可能かと」

「ですかー」

「はい。二人ともそれぞれに事情を抱えておりますから」

「でも、まあ諦めないで取り合えず声をかけてみてはどうでしょう？ 二人ともとてもいい人ですよ！」

「そうしてみます」

明るく言うコノハに天人はやや渋めな笑顔で答えた。

二人がほぼ同時にうどんを食べ終える。まだ仕事如山積みになっているらしく、二人とも食べ終えるとすぐに受付へと戻っていつてしまった。

再び一人になった天人はこれからどうしようかを考え始めた。コ

ノハとササユの話を書く限り、すぐには会えそうにない。頃合を見て天人は適当に引き返すことに決めた。

それから一時間ほど過ぎてから、天人はようやくその腰を浮かせた。今日はハンターはもうあまり来ないと判断したためだ。

現在、ユクモ村に来るクエストの狩場は溪流、孤島、砂原、水没林、凍土、火山の六つだ。溪流を除き、全ての狩場はユクモ村から距離がある。それ故に今から狩場に向かうと必然的に日が沈む頃に着くこととなる。そうなると狩猟の舞台は夜になってしまう。モンスターの大半は夜目が利くが、ハンターはそうもいかない。こういう理由でこれぐらいの時間帯にクエストを受注するのは上位クエストを受注するようなハンターか、腕によっぽどの自信があるハンターのどちらかだ。

女性の、加えてソロのハンターがまさかこんな時間帯にクエストなんて受注しないだろうと天人は判断したのだ。

しかし、その判断は間違っていた。

天人がギルドから出ようとしたまさにその時、一人の女性が入ってきた。自然、その姿は天人の目に留まる。さらにその背中にある武器を見たとき、天人は驚愕した。

？ブリッツワークス？。雷属性を持つ狩猟笛で名工の一つだ。鍵盤楽器を模したその狩猟笛はモンスターをただ狩猟するだけじゃ得ることが出来ない。気まぐれな金持ちや謎の団体などが特別に出す依頼を達成することで得られるチケットが必要となる、工房最高峰の技術が詰め込まれた特殊武器である。

他にも、ランスの？ブレインフォックス？。太刀の？南蛮刀？。金銀白金のガンランスである？クラウンシリーズ？などが知られている。天人もその存在は知っていたが、実際に目にしたのは初めてだった。

(すげえ……特殊武器なんて初めて見た……じゃなくてっ！)

初めて見た特殊武器の感動に当初の目的を危うく忘れかける。天人は慌ててその女性を追った。

マイペースな桜に調子が狂う。

桜が座っていたところは、あろうことかさつきまで天人が座っていた対面だった。つまり、天人は再び同じ席に着くことになる。

からかうためだけにずっと見てたんじゃないかなんてついつい思ってしまう天人だった。

「どうしたの？ 座んないの？」

「いや……」

桜に言われ、天人はゆっくりと腰掛ける。そうして本題を切り出そうとした途端、再び桜が喋りだした。

「君さ、自分が滅茶苦茶評価されてるって知ってた？」

「は、はい？」

「いや、だからさ。君、天人くんだよな？」

「え、ええまあ」

「すつごいよ、君の評判。なんでも、初クエストで装備を整えないままクルペッコトリオレイアを狩ったらしいじゃない？ あれ、ホントなの？」

「ええと……まあ、どちらもしりーさんと焔に助けてもらって、って感じですけど……」

「へえー。じゃあ狩ったことは事実なんだ。半端ないね、天人くん。初見で飛竜見てびびらないなんて」

びびりまくりでした、とは言えなかった。なんとなくだが。

桜は興味津々といった様子で続ける。

「なんでもかなりの腕の弓使いらしいじゃない？ ねえねえ、今ままでいるんな噂を聞いてきたんだけどさ、中でも一つだけ信じられないのがあるんだけど、聞いてもいい？」

「なんですか？」

「水中へ逃げ込んだロアルドスを曲射で仕留めたってホント？

これは流石に嘘でしょ？ モガの村のハンターじゃあるまいし」

「……………」

事実だった。

もちろん、天人自身が水中に潜ったという訳ではない。弱った口アルドロスが水中へ逃げ込み、水面下すれすれでうるちよるとしていたために試しに曲射をしたらうまい具合に突き刺さったという次第だ。

そのまま口アルドロスが息絶えてしまい、焰に散々罵られながら三人分の剥ぎ取りを一人水中で行ったのは苦い思い出だった。

「その反応だと本当なんだ……」

「あまり思い出させないでください……あれ以来もう二度とやらないと誓った芸当です……」

「ふーん」

桜が感心したようにまじまじと天人の顔を覗き込む。この時、天人はリリーと焰にあまり自分の噂を流さないよう注意することを決めた。

これ以上自分の噂を聞くに堪えなかったので、天人は話題を逸らす。

「ところで、その装備は……?」

「ん? これー? どう、可愛いでしょ?」

立ち上がって一回転してみせる。スカートがふわりと舞い上がって、白いふとももがちらりと目に映る。

初心な天人には刺激が強すぎ、目を逸らして赤面した。そんな天人の反応を見て満足そうに笑い再び席に着く。

「止めてください……」

「うふふ。可愛いねー天人くん。噂以上だね」

「からかうのも止めてください」

「いやーだってリリーさんが可愛い可愛い言ってるしさ」

注意だけでは済まない気がした。忠告が必要かもしれない。

「それで、その装備は?」

「スカラー装備一式だよ。モガの村の受付嬢が身につけている装備だね」

「受付嬢がつけている装備？」

「知らなかった？ ギルドの受付嬢がつけてる服、あれ実は防具なんだよ。しかもかなり実用性の高い優秀な」

「……何のために」

「さあ。でも可愛いからいいじゃない。桜もいつか桔梗一式揃えるんだー。あ、桔梗っていうのはコノハさんとかササユさんが着てる服ないし防具だよ」

モンスターの素材で出来た装備であれば、その防具が一体どの程度の防御力を持つか、そのモンスターの名前で大体分かる。基本的に危険度の高いとされるモンスターほどいい防具が出来るからだ。

天人は今までモンスターの素材で出来た装備以外を見たことがなかったし、興味もなかったため、？スカラー一式？も？桔梗一式？も分からなかった。

どちらも受付嬢に用意された優秀な防具だ。見た目とは裏腹に衝撃をよく吸収し、着ている者へのダメージ軽減率も大きい。

実は天人が着ているルドロス一式より高い防御性能を持っているが、天人は見た目で判断して大した防具じゃないと勝手に決め込んだ。

ペースを握りなおしたところで、天人はとうとう本題を切り出す。「えっと、そろそろ本題に入っていていいですか？」

「ん。別にいいよ」

満面の笑みが、薄い微笑みに変わった。天人はその変化に心の中で首を傾げつつも続ける。

「ええと……桜さん？ でいいんですね？」

「あれ？ 桜のこと知らないの？ へえー。以外。一月もいれば噂ぐらい聞くとおもうんだけど……まあいいや。じゃあ今更だけど自己紹介するね。雨宮桜あまみやさくら、十八歳。使う武器は狩猟笛だよ。よろしくね」

「十八……？ 俺と同じ年なんですわね」

「へえー。てつきり年下だと思ったよ。線細いし」

気にしていることをざっくりと言ってくる。悪意のない言葉に天人は苦笑するしかない。

「じゃあ敬語じゃなくていいんじゃない？ 桜、敬語で話されるの慣れてないし、正直むずかゆさを感じてたんだよね」

「分かった。じゃあタメで。……本題に入るよ。ええと、桜、リリィさんのパーティに入ってくれないか？」

「無理だね」

「……………」

即答されて二の句が継げなくなる。困り果てて眉をひそめる天人を見て桜は申し訳なさそうに苦笑した。

「桜も桜なりの事情があるの。ごめんね」

「……その、事情を聞かせてもらえないか。報酬の面とかだったら、俺の分け前から桜の望む分だけ……………」

「違う違う。そういうんじゃないよ」

笑ったまま手を振って天人の言葉を否定する。

ならどうして。パーティが嫌いなのか。疑問に自然と口が開きかけるが、桜はそれを遮るように先に言う。

「パーティが嫌いなわけでもないよ」

「だったら」

「でもね、ごめん。やっぱり今の桜じゃ、パーティは組めそうじゃない。ごめんね」

寂しそうに笑い何度も謝罪する桜に最早天人は何も言えなかった。話が終わったと見た桜がもういいよねと席を立つ。そんな桜を引き止めるように天人は慌てて声をかけた。

「えっと、桜。また見かけたら声かけていいか？」

「おっと。新手的のナンパかい？ 昼から大胆だね」

「そんなんじゃないだろ……………」

「うふふふ。いいよ。君と話すの楽しいし。からかい甲斐があった」「それと、時間を取って悪かった」

「気にしないでいいよ。どうせ溪流行って八チミツと薬草取ってくるだけだったから。それじゃあ、またね」

ひらひらと手を振って桜が酒場から出て行ったのを見やった後、数分待つて天人も酒場から出た。分かれた手前、ギルド内で顔を合わせるのは何となく気まずいので、それを避けるためだ。

ギルドから出ると、既に日は大分傾いていた。思っていた以上に話し込んでいたらしい。

天人は今日一日座っていただけに等しいのに妙に疲れた気がして、重々しい足取りで自分の部屋へと向かった。

想像以上の難題（後書き）

次回は11月12日に投稿予定です。

ガールズトーク

雨宮桜が目覚ますのは早朝の五時だ。早起きに特に意味はない。ただ、気がついたら早起きする体質になっていた。

夏の暑さも大分和らいできていた。溪流の木々も段々と赤や黄色に色づいてきており、紅葉を楽しめるのも近いだろう。

桜は閉じた窓を開け放った。冷たすぎない心地よい秋の風が彼女の頬を撫でる。

(……パーティ、か)

話題のハーレムビギナーが自分の噂を知らずに勧誘してきたことに、そんな素振りを見せないながらも彼女は驚いていた。

リリーも焰の桜の噂ぐらい知っているだろう。それなのに、どうして彼に言わなかったのか。

(まあ、興味もなかった女の話なんてされても困るだけか)

天人の真剣な顔を思い出して、彼女は無意識のうちに笑っていた。そんな自分に気づいて、慌てて頭を振る。

久しぶりに聞いたパーティという言葉に少々当てられてしまったのかもしれない。どうも自分らしくない。

彼女は壁にかけられた狩猟笛　ブリッツワークスと63式軍楽口風琴、そしてひしゃげた王琴トドロキだ　を見る。どちらも手入れは入念に行っていて、例え同じ武器を他人が持っていたとしてもよりいい音が出るのが彼女の些細な自慢の一つだった。唯一つ、王琴トドロキを除いては。

何となく、久しぶりに曲を弾いてみたくなった。彼女は二つの方から演奏するのに楽なブリッツワークスを取ると浴衣からスカラ―一式に着替えて外に出た。

その後姿は、少しだけ寂しそうだった。

この日も、二日前に打撃要員を加えようと話し合った酒場に彼らの姿はあった。時刻は朝の九時。食堂としても経営しているので、そんな早朝からも開いている。

大雑把に昨日あったことを報告すると、リリーも焰もさも分かりきってたかのような顔をする。確信が確定に変わる。

ユクモ村に流れる広大な川で取れた魚の定食を食べながら、天人は話しかかったことをおもむろに切り出した。

「で、なんで隠してたんですか。勧誘が難しいってことを」

「いやー……だって、天人くんかなり意気込んでたし、何か出鼻を挫くのもちよつと可愛そうだと思って……」

「同じ理由よ」

「……まあ、意気込んでいたのは否定しませんけどね……」

さて、どうしたものかと彼は嘆息した。

コト八とササユによれば、村で天人達が望む条件を満たすハンターの数は二人。そのうちの一人はすでに断られている。桜の反応を見る限りだと、そのもう一人も望みは薄いだらう。

「……諦めるしかないんじゃない？ 別にあたしは三人でもいいと思ってるけど」

「天人くんが入る前もそんなこと言ってたでしょう、そんなことじゃあ聞くけど、天人くんが入る前と後、どっちが楽？」

「それは……」

「言うまでもないでしょう？ 事実問題として、この二週間での話にはなるけど、私の収入は間違いなく増えてるわよ？」

天人がユクモ村に来てから一月が経っている。だが、リリーが退院したのは天人よりも更におよそ二週間も後だった。実際に三人で

狩りをしていたのは二週間ほどしかない。

しかし、天人がいなかった二週間といた二週間での稼ぎは確かにいた時の方が多かった。

「あたしもそれは認めるけど……でも、たまたま大型モンスターのクエストが多く張られていたっていうのもあるけどね」

「大型っていうか、中型だね。ボルボロスはまあ、大型って言ってもいいかもしれないけど」

自然界の法則として、食物連鎖というものがある。

植物は土から養分を吸い、植物を草食動物が食べ、草食動物を肉食動物が食らう。生物遺体は微生物を始めとする分解者によって無機塩などに分解され土に返り、これをまた植物が吸う。

その特性上、個体数は食物連鎖にトップに君臨する肉食動物ほど少なく、下にいくほど増えていく。これはもちろんモンスターにも言えることで、リオレウスやジンオウガと行った大型肉食獣は個体数が少なく、クエストにその名前が挙がることもあまりない。

ましてや狩猟対象となることは稀だ。ハンターランクがなかなか上がらないという状況はこういったところにも起因している。だからからこそ経験豊富な上位ハンターはとても優遇されると言えた。現役を引退してもハンターを育成する教習所に勤めたりも出来る。中にはモンスターの生態系を著すハンターもいたりする。

ユクモ村ではモンスターの危険度は星の数で示される。大型モンスターのほとんどは危険度が五つ以上だ。最高ランクの八つにもなると、食物連鎖から外れたさらに希少なモンスターや、その地域の生態系を破壊するような凶悪なモンスターまでいる。

古龍と呼ばれるモンスターも多くがこの希少なモンスターのタイプに相当する。どの種族にもカテゴライズできない特殊なモンスターをまとめて古龍と呼んでいるが、恐らくその固体の少なさゆえに研究がなかなか進まないというのがカテゴライズ出来ない最大の理由だろう。

「言われてみれば、最近は確かに中型のモンスターの依頼が多かったわね。大型の依頼も増えてるみたいだったし……」

「まあ、深く考える必要はないんじゃないですか？ たまたまでしよう」

「……とにかく」

リリーはそれかけた話の軌道修正をした。

「笛かハンマー使いがパーティに一人いれば、更に効率も上がるはず。効率がよくなれば収入だって増えるし、ハンターランクだって上がりやすくなるわ。取り合えずダメもでもう一人のハンターに当たってみましょう。それでいいかしら？」

「分かった」

「了解です」

焰も天人も頷く。元より二人とももう一人の要員を望んでいるのだ。否定などするはずもなかった。

話もまとまったところで食事も終わり、食事をかねた報告会、ないし集会はお開きとなった。お昼頃にまたギルドで集合することにして、三人は解散した。

焰が酒場から家に帰る途中、先ほど話題に出た人物と出くわした。

「あ、桜」

「んん？ あらら。こんな時間に焰ちゃんと会うなんて奇遇だね。

まだおはようの時間なのに」

「ちゃん付けは止めてって、一体何回言えばいいのかしら……」

「人間諦めも肝心って知ってる？」

桜は焰より一つ上で、狩猟生活も長い。焰にとっては先輩ハンターだ。それらの条件と焰の可愛い見た目も相まって、出会った当時から焰のことをちゃん付けで呼んでいた。

焰がこめかみの辺りをひくつかせるのを見て、慌てて桜は話題を切り替える。

「ところで、昨日君達のパーティーの天人くんとお話したよ。なかなかどうして、また彼も面白い人だね」

「まあ、確かにおかしいわよね」

主に狩猟中の話だが。

「しかもイケメンだし」

「そつ、そこは関係ないでしょうっ!!」

「おやおや？ どうしてそんなに動揺するのかな？もしかしてえ

ー、焰ちゃんはあー、天人くんのことがあー？」

「ぜ、全然っ!? 確かにハンターとしての腕は凄いけど、何かへなへなしてるしヒョロいし女々しいしかと思えば時々頼もしいしだけどやっぱり頼りない感じも……」

「あーはいはい。桜が悪かったからそこら辺でストップ、ストップ」

長くなりそうだったので桜が無理やり焰の話を止める。からかつたつもりだったが、それが裏目に出してしまった。

（つていうかコレ、本気で天人くんのこと好きじゃん。確かにカッコいいはあるけど、なんか頼りない感じもするし、どこがいいのかねえ？）

顔を赤くしてもじもじとする焰なんて桜は初めて見た。まさに、恋する乙女といった感じの焰に、流星の桜も動揺を隠せない。

桜の知る焰は決して男を近づけるようなことをしない、潔癖なまでの少女。リリーは自分を隠すのが上手いのであまり気にならないが、焰は自分に素直なので感情がすぐに表に出る。もちろん、男と全く話さないというわけではないが、それでもツンとした態度を崩

さなかつたと記憶している。

そんな少女が今目の前で男の話題を出されて頬を赤く染め、はにかんでいるのだ。

「……どこがいいの？」

呆気にとられた桜は思わず本音が出てしまった。

「だから、別に好きなんかじゃ……」

「焰ちゃん、今自分がどんな顔してるか、分かる？」

「え？」

「……」

「……」

「顔を真っ赤にして、ちょっと俯いてはにかんで、真剣になんて答えようか考えてるような」

「わーわーわー！」

焰の反応を見て、桜は確信する。

(焰ちゃん、ベタ惚れじゃないですかー)

顔を逸らして苦笑い。ちょっとからかうつもりが、やぶ蛇になっ
てしまった。こういった事情に疎い彼女は早速後悔し、話題を変え
ようとした。が

「頼りない風に見えて、実はとっても頼りになるのよ、アイツ」

「え？」

顔は赤らめたまま、焰がポツリと言う。

「右腕を昔怪我したらしくて、そっちの方の筋力が左腕に比べてかなり弱いつていうハンデがあるくせに、それを感じさせない技量とかも持ってるし。なにかといつもあたしとかリリーに気を遣ってくれるし。知ってた？ あたし達、あいつをパーティに引き入れる際にクイーンブラスター？をあげただけで、作るのに使った素材を返すために毎日クエストボードチェックしてるのよ。リオレイアなんてあまり張られないからね。結構苦勞してるみたい。しかも、お

金も少しずつためて返そうとしてるし。ホント、馬鹿みたいよね」
「……………」

「それに、まあ、なんていうか。その……あたしを助けてくれたときとか、結構カッコよかつたし」

蚊の鳴くような声で付け加える。

桜も噂には聞いていた。焰がやられる寸前で天人が助けに入ったことを。そのおかげで焰が助かったということ。

だが、噂はあくまで噂に過ぎない。焰、そしてもちろんリリーともそれなりの付き合いがある彼女はそんな噂をそう易々とは信じられなかった。彼女達の実力を知っているからだ。そう簡単にやられるような実力では決してない。

しかし今の焰の話聞く限り、どうも噂は事実らしい。

（あの線の細さで、か……まあ桜も焰ちゃん達も人のこと言えた義理じゃないけど）

少しだけ彼のことを見直す。天人が彼女の装備を見た目で判断したのと同様、彼女もまた彼のことを見た目で判断していた。

噂は出鱈目で、どうせリリー達の金魚の糞でしかないだろうと。

昨日の曲射の話も口から出任せを言ってるのではないかと内心では疑っていた。

焰が嘘をつくことはない。ついたとしてもすぐに分かる。彼女は根っからの正直者なのだ。

彼女の語る天人のイメージが自分が抱いたものと大きく異なっていて、桜は少しだけ彼に興味を持った。主に、その噂の弓の技術に
だが。

リリーや焰のように男性が嫌いというわけではない。ただ、桜の興味を引くような男が周りにいなかったため、いつの間にか恋愛に興味がなくなっていた。

「天人くんの人柄はともかく、狩猟技術は見てみたいね。ソロとかでも結構イケちゃう感じなのかな？」

「まあ、多分。パーティーで活動していないときとか、一人でちよこちよこことクエストに行ってるみたいだし」

「ふーん」

あくまで興味がない風を装う。ここで焔に変な勘違いをされるのは彼女の望むところではなかった。

「あたしらのパーティーに入れば見れるけど？ どう、今からでも入る気はない？」

「ないない。桜、永遠のソロハンターだし」

「そ。ま、いつか見れるんじゃない？ 闘技大会とかで」

勧誘に対する回答は分かりきっていたので、焔は軽く桜の拒絶を流す。

桜も特に気にした様子もなく話を続ける。

「まあ、いつかみる機会もあるだろうし、それまで気長に待ちますかね、桜は」

「そうしなさい。きっと度肝を抜くようなアクロバティックな行動をしてくれるから」

そこまで話し、自然とお別れムードとなる。元より、偶々道であったから話をしていただけなのだ。長く話し込むつもりはどちらにもなかった。

そのまま二、三言葉を交わし、二人は別れた。

一ハンターとして、桜はその天人の技術を見れるいつかを楽しみにしていた。

だがそのいつかは思っていた以上に早くやってくることを、彼女は知る由もなかった。

ガールズトーク（後書き）

次回は12月3日に投稿予定です。

狩猟シーンをお待ちの皆様、申し訳ございません。

第二話三部目にして天人たちと桜とのやりとりしかまだ書かれていません。狩猟シーンはまだまだ先になりそうです。

出来るだけ戦闘シーンも長めに描こうと思うので、勘弁してください；

優しい叱咤

桜と話してから数日、大型から中型モンスター狩猟のクエストが張られることはなく、天人達は一日にまとめて簡単なクエストをこなしていた。

ユクモ村におけるハンターの仕事は主に、小型モンスターの討伐や危険地帯にある鉱石や食物の採集だ。ユクモ村からの依頼もあれば、ハンターのいない近隣の小さな村からも度々依頼もある。どちらかというと後者のほうがその数は多い。

凶悪な大型モンスターの討伐クエストとなれば、それなりに名の知れた街へと依頼が自然と流れていく。実際、ユクモ村にいるハンター達の約半数は自分の食い扶持くいぶちを稼ぐので精一杯という有様で、そうなるのも仕方がないといえた。

現在、ユクモ村が抱える最高ランクのハンターはハンターランクHR5のハンターが四人のみ。その他のハンターは皆HR3以下、つまり下位クラスだ。

中型モンスターのクエスト程度なら普通に張られはするが、それでも今回の頻度は少しばかり普通ではなかったのは間違いない。実際、ユクモ村で対応できるか出来ないか、ギリギリのラインの量だった。

それも今では落ち着き、こうして簡単なクエストに精を出しているというわけである。

来た直後にちょうど忙しい時期に入った天人は、てっきりあの忙しさが普通だと思っていたので正直安堵していた。

今回彼らが受注していたクエストはタケノコとケルビの皮の採集、そして最近ユクモ村のすぐ傍で確認されたジャギイ達の群れの討伐。中型、大型モンスターの姿も確認されておらず、そんなに時間をかけることなくすぐにクエストを終えた。

ユクモ村に戻った三人は一旦それぞれの家に戻り、防具から普段着へと着替えた後いつもの酒場に集まった。無論、反省会のためである。

ただ、ここ最近の話題はずっと少し前までの忙しさと新しいメンツのことで持ちきりで、あまりそれらしい話はしていない。

「しかし、途端に来なくなっただわね、中型以上の討伐依頼」

「そうね。まあ、私としては忙しくなくなってありがたいけれど」

「あの量は異常だったわよね……よくもまあユクモ村だけで処理してきたものだわ」

もしもユクモ村だけでの対応が困難だと判断されれば、その依頼は他の街や村へと回されることになる。尤も、本当に無理だと判断されるまで回されたりはしないのだが。

報酬金額の決定は基本的にギルドが行っている。依頼者が出す金額がそのまま全部ハンターへと渡るわけではないのだ。

狩場へ運搬するアイルーへの給与をまずは差し引き、さらに依頼をまとめるコノハやササユ、その他ギルドに勤める業務員に対する給与と分を差し引く。他にも、応急薬や携帯食料といった支給品などといった必要経費を引かれた最終的な金額がハンターへの報酬となる。

つまり、ユクモ村でこなした依頼の数だけギルドも儲かるのだ。

これが一般的に他の街や村のギルドにクエストを回したからない理由だ。

「他の地域で縄張りが奪われたのかもな。それで、ユクモ村近くへ来たのかもしれない」

「全く、たまったもんじゃないわよ。中型モンスターがはびこってたせいで小型モンスターもなんだか活発に活動し始めるし。ホント、少しぐらい休みたいわ」

「それに、ユクモ近辺がざわついていたせいか、温泉目当てでやってくるお客さんも少なくなってきたみたい。村長さん、疲れたきつた顔で話してたわ」

「コノ八さんもササユさんも忙しそうでしたしね。この間お話したときも仕事が山積みって嘆いていました」

「それ、絶対コノ八でしょ」

焰がため息混じりに、どこか確信を持ったように言う。天人はそれに困ったように笑って肯定の意を示す。

「でも、実際ササユさんも大変だって言ってたからな」

「ともかくこれで多少は落ち着くでしょう。……で、打撃要員の件だけねど」

「……………」

「……………」

リリーが重々しく切り出すも、その反応はあまり芳しいものではない。

桜に断られた後、もう一人の条件を満たすハンターに声をかけたが、丁寧な言葉でやんわりと断られてしまったのだ。つまり、もうすでに当てがないのである。

「もうしばらく三人でやることになりそう、ですよね」

「そうねー。桜もローシャもやっぱ無理だったし」

「ロ、ローシャさんはもしOKだったとしてもちよっとお断りしたいかなー、なんて……………」

ローシャとはそのもう一人のハンターの名前だ。フルネームはユナローシャ・リリオール。桜と同じく狩猟笛を扱う二十代前半の女性ハンターで、物腰の柔らかい大和撫子としてユクモ村ではそれなりに名が通っている。ハンターランクは桜と同じで3で、天人たちよりも一つ上だ。

ちなみに、天人もここ最近挨拶をしたのだが、その際にリリーと一緒にからかわれ、若干の苦手意識を抱いている。おしとやかな微笑を崩さずにリリーのノリに乗ってくるのもだから言い返しづらく、桜よりも数倍質が悪かった。

思わず顔を引きつらせる天人を見てリリーが愉快そうに声を弾ませた。

「えー。そんなこと言ってるいいのかな？ ローシャさんに言ったらきつと悲しむと思うなあ」

「リリー、そこまでにしておきなさい。天人、結構本気で萎縮してんじゃない」

「焰……俺の味方はお前だけだよ」

「別に味方したって訳じゃないわよ。リリーを調子に乗らせたら話が進まないから、仕方なく……」

「焰。こういうところでさりげなくアピールって、ずるくない？」

「自然な成り行きでしょう！」

顔を真っ赤にして叫ぶ。しかし、リリーの目つきは冷めており、抜け駆けした焰を言外でも非難していた。天人は視線を逸らして我関せずという態度を取っている。

「まあいいわ。とにかく、今後の新人チェックは必須になってしまったというわけね……」

「今まで二人でいいと思ってやらなかったしね」

「っていうか、俺は無理に四人にしなくてもいいと思ってるんだけどね」

「何それ。一人だけ余裕ってこと？」

「どうしてそうなるんだよ……」

相変わらず態度のキツイ焰に天人は肩を落とす。

「この三人なら苦労ながらもなんとかやってけると思っただけだつて」

「あら、天人くん。嬉しいこと言ってくれるわね」

「どうかしらね。今後あたし達もランク上がるだろうし、ウラガンキンとかの狩猟で苦労すると思うのだけれど」

数日前までの自分の意見を翻し、彼女は天人の提案を否定する。

「どうやら、今はやる気らしい。」

「もしどうしても無理そうなら、またその時考えればいいじゃないか」

「今までのあたし達がそうだったのよ。問題先送りにし続けてきて今に至るの。まあ、途中から本気で要らないって考えてたっていうのもあるけど、あんたが入ってから狩猟も大分楽になったし、やっぱり入れておいたほうが絶対いいわ」

さりげなく褒められた天人は、しかしやはり居心地悪そうに身じろぎする。未だに褒められる事に彼は慣れてなかった。

焰もリリーも天人の自信のなさにはすでに呆れかえっており、最早何の反応も見せない。

「でも、新人ハンターってユクモじゃ珍しいんじゃない……」

「そ。その上、他のパーティーも狙ってくるから大変なのよ。結構ライバルも多くてね」

「打撃要員を募集してるパーティーは、確か私達以外に三パーティーほどあったかしら」

「ちゃんとそこら辺のこと調べているんですね。驚きです」

「私も重い腰を上げたってわけよ」

リリーが珍しく苦笑いで答えた。それで彼女も本気であることが窺える。何だか自分だけがやる気のない奴のように思えて、天人は罰が悪そうに頬を掻いた。

天人も決してやる気がなかったわけではなかったが、出鼻を挫かれ大分削がれていたのは紛れもない事実だった。ローシヤに断られるからは、ほとんど諦めていたといっても過言ではない。

彼はいつもの笑顔の下で密かに奮起した。自分だけがだれているわけにはいかない。もう一度桜とローシヤに交渉を持ちかけてみようとして彼は決めた。

その日も結局クエストの内容に触れることなく反省会を終える。段々と趣旨がずれていることに気づいた天人は二人と別れた後で一人苦笑した。これは早くメンバーを揃えねばなるまい。

帰宅途中、彼は回復薬とハチミツを切らしていることに気づき、向かう先を村で最大の雑貨屋へと変える。もう既にユクモ村に来てから結構な稼ぎになっていて、わざわざ自分で素材を取ってきて調合することはなくなっていた。

そんな些細なことがやけに嬉しく、上機嫌で彼は雑貨屋へと向かう。

雑貨屋の前に着くと既に先客がいた。雑貨屋の店員と話すその姿には見覚えがある。天人は駆け寄って彼女に声をかける。

「よ、桜。久しぶり」

「およ？ 誰かと思えば期待のルーキーじゃないですかい。どしたの？ またナンパ？」

「そんなところ」

最早妙な呼び方にも突拍子もない言動にも突っ込むまい。天人はリリーとやりとりで相手のペースに乗らないことを覚えてきていた。反応があると思った桜が意外そうに目を開き、やがて不満げに口を尖らせる。

「なんか、最初会った時ほど可愛くない……」

「そりゃ結構だ。俺は男だからな」

「かつこよくもない」

「本当かよ!？」

思わず突っ込んでしまう。しまったと思うが、もう遅い。桜が満足そうに頷くのを見て、自分がまだまだ未熟であることを自覚する。「いやー、やっぱりそうじゃないと天人くんはさ。からかい甲斐があつてこそその君だよな」

「俺は君のおもちやか何かか……」

「似たようなものかな」

「……もうなんでもいいけどさ」

天人はこの時点で自身の敗北を悟った。やはり自分は女性に勝てないのかもしれない。本気でそんなことを考える。

「桜は何買ってたんだ？」

「桜？ 桜は砥石とかトラップツールとか……いろいろかな」

ほら、と桜は自分が抱えている二つの袋を天人に見せる。確かに結構な量だ。ハンターという職に就いているといえど、この量はキツイだろう。

天人は無言で桜が抱えるうちの一つを取る。あまりにも自然体だったので桜はただそれを眺めていることしか出来なかった。天人が重いなと呟いているのを聞いてやっと彼女は反応した。

「こんなところで大胆にも泥棒ですか？」

「違うだろ。重そうだから一つ持ってあげようっていう親切心だ」

「そういうのってさ、普通全部男が持つてくれるもんじゃない？」

「一つだけじゃなくてさ」

「自分で言うのもなんだけど、俺はハンターとは思えないほどに貧相な筋力なんだよ」

「ふふふ。冗談だよ。ありがと。でもいいよ。桜んち、結構こつから距離あるから大変だし」

「……一度持ったし、いいよ。ちゃんと運ぶ」

「何、その妙な間は」

結構本気で天人が悩んだのを見て思わず苦笑い。どうやら本当に筋力が弱いらしい。

かといって、彼女も彼の善意を無下に断るつもりはなかった。一つは天人に任せるという意味合いも込めて桜が家に向かって歩き出す。

天人は自分の買い物がまだ済んでいないので雑貨屋を名残惜しく見つめていたが、また後でもう一度来ようと思いついて桜の背中を早足に追った。

桜の右側に並んだ天人の姿を眺めてはたとあることに気づく。

右側に並んだというのに、右腕に持ち替える様子がない。

「あれ？ 君、左利きなんだ？」

「いや、右利きだよ」

「ふーん。どうしてまだ左手で持ってるんだい？ 桜とぶつかったりして持ち辛くないの？」

「……目敏いな」

「ふふん？ これでもソロでハンターやってるんでね。洞察力はある方なの」

機嫌よく微笑む桜に対し、天人は妙に反応が鈍い。

あまり触れて欲しくない話題だったかと彼女は気まずそうに視線を逸らす。

「えーと、実はコンプレックスだったりする？」

「まあね。唯でさえハンターとしては貧弱な筋力なのに、右腕は更に弱いから」

「……昔何かあったの？」

「ま、色々あったかな。俺が飛竜嫌いっていうのは知ってる？」

「ううん。初耳だよ。でも、飛竜嫌いねえ。一発目でリオレイアを狩っておいて、って感じはするけど」

「それはまあ、焰もいたし、偶々だよ。……嫌い、というよりも恐怖症っていうのに近いかな。飛竜を見ただけで体が竦むほどには、俺は飛竜が嫌いなんだ」

「恐怖症？ そこまで？」

桜が心底意外そうな顔をするものだから、天人は笑ってしまった。こっぴどい素直な反応をもらったほうが彼としても話しやすかった。

「小さい頃、俺、リオレウスの希少種に襲われてね」

「希少種？ ってことは……銀に！？」

桜が驚くのも無理はない。リオレウスの希少種といえば、滅多にお目にかかれないモンスターなのだから。

太陽と比喻される体の色は、赤でもなく蒼でもなく、鈍く光る銀色。その攻撃性は通常種のリオレウスの数段上を行き、リオレウス希少種が吐き出す火炎球を喰らおうものなら装備次第では即死もありうる。

さらに見た目通り甲殻は鋼のように硬く、弱点属性も部位も通常種とは異なってくる、歴戦のハンターでも狩猟には苦勞すると言われている。

言われている、と曖昧な表現になるのはクエストに張られるところか、目撃されることすらほとんどないからだ。

発見当初は亜種を見間違えただけだと言われていた希少種だが、現在では確かにその存在は確認されており、生態の研究が進んでいる。と言ってもその固体は通常種や亜種と比べてかなり少なく、研究はほとんど進んでいないに等しい。

それ故、発見されればどの研究者も多額の報酬を出して捕獲依頼を出す。その額は並のハンターが一年で稼げるのと同額とまで言われている。

それほどまでに希少種というのは珍しく、かつ謎に包まれた固体なのだ。

「そう。銀に右腕をやられてさ。リハビリして回復したけれど、それでもやっぱり剣を持つにはちょっとね」

右腕をやられた。そういえば、と桜は少し前に焰と話したことを思い出す。

右腕を昔怪我したらしくて、そっちの方の筋力が左腕に比べてかなり弱いつていうハンデがあるくせに……

右腕に怪我をしたとは聞いていたが、まさか希少種によるものだったとは。天人には申し訳ないが、ある意味でそれはラッキーなよくな気もしてくる桜だった。

少しだけ自己嫌悪。もちろん、表情には全くだしたりはしなかったが。

「結局、弓を持つので精一杯。元々筋力ない方だったのに、更に弱くなってしまった」

「でも弓で成功してるじゃん。それでよくないの？」

「成功、ね……。俺なんて、まだまだだよ」

首を振って桜の言葉を否定する。そんな天人の態度に、桜は少しムツとしたように怒気を込めて言う。

「……あのさ。前々から思ってたんだけど。君、事故卑下が過ぎないかい？ 君の今までの成績は褒められて然るべきものだよ。だっていうのに、君は大したことないって言う。謙遜も過ぎれば人を不愉快にするだけって知ったほうがいいんじゃないかな」

「ごめん。別にそんなつもりはなかったんだけど……」

「知ってる。でも、気をつけてって話よ」

厳しい叱咤。そして優しい一言。今まで自分の謙遜を注意されたことなんてなかった天人は、それにどう応じればいいのか分からない。い。

答えあぐねる彼を見て、桜は困ったように笑った。これではまるで自分がいじめているみたいだ。

「別に難しい話じゃないわよ。褒められたら、素直に喜べばいいの」

「……分かった。心がけるよ」

「よろしい」

ぎこちなく頷く天人に桜は軽快に笑う。そんな桜の笑顔に天人も釣られるようにして弱く笑った。

優しい叱咤（後書き）

次回は12月24日の投稿予定です。

噂

「……で、わざわざお誘いいただいたわけだが、ずっとダンマリじや俺も困るんだが」

天人が呆れたようにため息をつく。いやぁーと照れたように後頭部を掻き、眉尻を下げて困ったように笑う。

荷物を持ってもらったお礼ということで、夕飯は桜の奢ってもらったことになった天人は桜のオススメだという飲食店にいた。

オススメというだけあって値段の割りに味はかなり良かった。さつさと食べ終えた天人は、箸の動きが思っていた以上に遅い桜が食べ終わるのを待っているのだが、さつきからその桜が何も言わないので、ついに痺れを切らしたのだった。

「だってさ、どんな話すればいいか分かんないじゃん？ 桜達、そんな仲が良いって訳でもないし、込み入ったことか聞けないし」「別に込み入ったこと以外の話をすればいいだけじゃないか」

「もう天人くんに聞きたいことないんだよなぁ……。そうだ。君が桜に聞きたいことはないの？」

「……俺が？」

そうと満面の笑みで頷く桜。天人はしかし困ってうめくだけだった。

先も桜が言ったように、彼は桜とそう仲が良いわけではない。友達というには付き合いが浅すぎる。知り合いが精々といったところだろう。

気になることがないわけではない。パーティが嫌いなわけではない、というあの言葉。では、どうして彼女はこうも頑なにパーティに入ることを拒むのか。

しかし、これを果たして聞いていいものか。暫く逡巡した後、天人は結局首を振った。

「これと違ってないかな。気になることがないと言えば嘘になるけ

ど、気軽に聞けることじゃないと思うから」

「そっか。まあしょうがないよね」

話題が再び途切れ、得体の知れない気まずさが二人の間に漂う。

苦し紛れにお冷を飲んでいる桜を見て、天人はどうして自分を誘ったんだろつと嘆息した。

「まあそんな嫌そうな顔しなさんな。桜、少しだけ悲しくなっちゃうぞ」

「あんまりこういう状況に慣れてないんだよ。諦めてくれ」

「こういつって、女の子と二人っきりのってこと？」

「……そ」

「呆れた。普段からリリーさんと焰ちゃんと一緒にいるくせに」

「三人と二人とじゃ違うだろ。一対一、つまりサシだ。緊張感も違う」

分かるような分からないような、そんな微妙な説明に桜はうーんとうなる。

「でも緊張する必要ないんじゃないかな？ 桜のこと女の子扱いし

なくてもいいよ？ 桜、君のこと恋愛対象外と思ってるから」

「はつきり言ってくるね……。そりゃまあ俺は女々しいけどさ」

「あー違う違う。桜はただ単にそういったことに興味がないだけだから。君の容姿は優れてると思ってるよ」

「……どっちでもいいけど、とにかく女の子扱いしないなんて出来るわけないって……」

「？ どうして？」

「……」

本気で何故か分からないらしく、普段の悪戯っぽい瞳には純粹な疑問で満ちていた。

「ここで可愛いからと素直に言えるほど天人は度胸がない。適当に言葉を濁してこの場はやりこす。」

「桜は女だろ。どうしてもそついう扱いになるってこと」

「男か女かだけじゃないと思うんだけどなー。もしかして、男と女の友情はありえないとか考えてる人ですか？」

「そついうわけじゃないよ」

「ならいいじゃん。まあ友達っていうには早すぎるかもしれないけど、同じハンターだし、仲間意識ぐらいいはあるから一人の狩り仲間として扱ってよ」

「そんなこと言うならパーティ入ってくれよ」

「……………」

笑顔が一転、途端に渋面になる。

天人は慌てて謝った。

「ごめん。軽々しく言えることじゃないな」

「ま、咄嗟に出ちゃ言葉ってあるしね。気にしないで良いよ」

流れかけていた重い空気が再び充滿する。天人は軽率な自分の発言に激しく後悔した。

天人が無理に繕った笑顔で再び何か話題を出そうとしたとき、店の扉が荒々しく開いた。出かけた言葉が引っ込み、咄嗟にそっちへと視線が行ってしまう。

入ってきたのは男女比が対一の四人組。防具をつけているのを見て彼らがハンターだということが分かる。恐らくはクエストから帰ってきたばかりなのだろう。防具は少し汚れが目立った。

迷惑そつに店員が顔を顰める。しかし、そんなのお構いなしとリーダー格の男は武器　スラッシュアックスだが、天人にはその武器の名前までは分からない　を壁にもたれさせるようにして置くと、六人ほどが座れるテーブルを陣取った。他の三人はそれなりに常識は備わっているようで、同じように武器を置いた後申し訳なさそつにおずおずと腰掛ける。

「……………あんなハンターもいるのか」

「そりゃね。ユクモ村の人って基本的に穏やかな人ばっかだから皆がそつなんだって勘違いしやすいけど、ああいう人間だっているよ」

桜がむき出しの嫌悪感を見せるので、天人は少々驚いた。

装備を見る限り、ランクはそう高くはなさそうだ。恐らくは簡単な依頼ばかりこなしているのだろう。しかしながら彼らはさも自分らが偉いと言わんばかりな振る舞いを見せる。

悪目立ちする彼らに注目していると相手もこちらに気づいたようだった。自覚はないが、天人は今時の人である。彼が彼らを知らずとも相手は知っただけでもおかしい話ではない。

リーダー格のがたいのいい男が近づいてくる。改めて、天人はこの男を見た。

年齢は三十ほどだろうか。顎の辺りに生やしている無精ひげが妙に目立つ。身長は二メートルを優に超えており、容貌だけ見てみれば確かに天人よりいかにも、といった感じがする。

男は天人の前まで来ると気さくな態度で天人に話しかけた。見た目以上に性格は柔和らしい。

「おお！ こりゃ、噂のハーレム男じゃないか！ どうしてこんなところに」

「え？ ええっと、桜さんと食事をちょっと……」

「……桜あ？」

笑顔を一変。ぎろり、と剣呑な目つきで天人の向かいに座る桜を睨んだ。しかし睨まれた当の本人はどこ吹く風で食事を続けている。そんな桜の態度が気に食わなかったのか、男は下品に舌打ちすると天人へと向き直る。

「お前さん、なんでこんな女と一緒にいるんだい」

「こんな女って……」

「なんだ。こいつの噂、まだ知らねえのかい？」

「……噂？」

びくり、と桜の眉が跳ねた。そんな些細な反応も男は見逃さず、愉悦に浸った笑みを浮かべて高らかという。

「そいつはパーティーの連中裏切った人殺しなんだよお！」

店全体に響き渡る声。物騒な単語に周囲の客がざわめきだす。いよいよまずいと彼の仲間が小走りでこちらへとやってくる。

「ちよっと。ロアン、いくらなんでも言いすぎだって」

「ユクモのハンターは誰でも知ってることだろう。言い過ぎでもなんでもない」

「……どういう、意味ですか」

かろうじてという感じで声を出す天人に、不愉快そうにロアンと呼ばれた男は言う。

「どうもごうもねえよ……。二年前、そいつはパーティのメンバーを狩場に残して一人無傷でのこのこと帰ってきやがったんだよ。気さくでいい連中で、ユクモ村でも有名なハンター達だった。実力も村長さんの折り紙つきだったよ。いずれこの村初めての上位ハンターになるって期待されてたほどだからなあ」

「ちよ、ちよっと待ってください。それでどうして桜が殺したってことになるんですか」

「簡単な話だ。クエストの内容が失敗するようなもんじゃなかったからだよ。そいつが入ったばっかだったからな。難しいクエストを受けられなかったんだろうよ。依頼の内容はユクモに荷物を輸送していた業者を襲ったドスジャギイの狩猟。なんら難しいもんじゃねえ」

ドスジャギイとは、ジャギイやジャギイノスを統べる群れの長だ。アオアシラと並び、初心者ハンター最初の関門とされる。

しかしながら攻撃自体は単調なもので、熟練ハンターにとってはそう危険なモンスターではない。

「だっていうのに、パーティは壊滅。加えて取り残された三人は遺体すら見つかんねえ。狩場にあつたのはあいつらの武器と防具だけ。おかしな話だとは思わねえか？」

「遺体すら見つからない……？」

ハンターの殉職率は確かにそう低くない。それ故、殉職したハン

ターはハンターランクをギルドから上げられた後、大々的に葬式が行われる。

ただし、それはハンターの遺体があつた場合に限られる。死亡確認が出来ないと、ギルドは動いてくれないのだ。葬式もコストがかかる。それも、村を上げてのこととなれば尚更だ。ある意味でそれは当然とも言えた。

つまり、桜がかつてパーティを組んでいたというそのメンバーは、全員……

「そうだよ。あいつらは葬式すら挙げてもらってねえ。当時村で一番のハンターであつたにも関わらず、だ」

「……………」

「結局、あいつらは身内だけでひっそりと葬式を行ったよ。ご家族はみんなあいつのことを恨んでるぜ。疫病神、人殺しってな」

侮蔑の眼差しを桜に向けるロアン。天人は今の話が信じられず、言葉を失う。

「桜じゃ、ない……………」

ふと、後ろで声が聞こえた。振り返る。

「桜じゃ、ない！」

気丈にロアンを睨みつける彼女の瞳からははらりと零れるものを見て、天人はハツと我に返った。

しかし彼はふんと鼻を鳴らすだけで依然として汚物を見るような視線を桜に向けている。

「？あれ？は、桜のせいなんかじゃ……………」

「ハン。どうだか。うまく媚び売ってあいつらに付け込んで、不意打って殺したんだろっ？」

「それ以上は止めてください」

苛立ちが籠った天人の言葉に、男が怯む。視線を天人に流せば、冷たい視線が彼を貫いた。

温厚な天人だからこそ、その視線は言葉には出来ない凄みがあった。言い返そうと口を開こうとするも、天人に気圧され言葉が出てこない。ロアンはちつと舌打ちするとどこかどかと出口へと向かう。

「ライラ！ フィーネ！ 修！^{しゅう} 出てくぞ！ こんな奴がいるんじや美味い飯も不味くなる！」

壁に立てかけておいた武器を背負いなおすと、入ってきたときと同じように荒々しくドアを開いて出て行った。彼の仲間はおろおろとした後、天人と桜に恭しく一礼してから彼の後を追うように出て行った。

しんと静まり返った店内。桜のすすり泣く声だけがやけに大きく聞こえる。

ロアン達一行が出て行った今、自然な流れで天人達に注目が行っていた。天人が威嚇するように周囲を見渡すと気まずそうに視線を逸らす。

彼は彼女の手を取ると、無理やり立たせた。財布から明らかに必要額以上の金額をテーブルに置くと、彼は桜を庇うようにして店を出た。

噂（後書き）

次回は1月1日に投稿予定です。

二つの過去

桜の住居は二階建てのハンター専用の宿舍の一室だ。天人も宿舍暮らしたが、ここはまた彼の住むものとは違うものだった。

大きな違いとしてその規模が挙げられる。天人の済んでいる部屋が八畳ほどなのに対し、桜の部屋は八畳の部屋が二つあり、居間と寝室が分けられている。恐らくはその賃金も天人の部屋の二倍以上はするだろう。

だが、だからこそ彼はあまり躊躇することなく彼女の部屋に入ることが出来た。

依然として泣き止まない桜を取り合えずクッションの利いた椅子に座らせると、彼は次にするべきことが見つからず、暫く逡巡した後、後に床に腰を下ろした。

すんすんと鼻をすする桜の声が聞くに堪えない。気の利いたことの一つや二つも言えない自身に、天人はやるせなさが積もる。

「……俺、帰ったほうがいいか？」

拳句の果てに出た言葉がコレ。情けなさに天人は項垂れる。

帰って欲しい。桜の答えは恐らくこうだろうと予想していた彼女は彼女の返答を聞く前に立ち上がり、ドアの取っ手部分に手をかけたが、桜はその予想を裏切った。

「もうちょっとだけ、いて欲しいかな」

意外な返事に彼は戸惑ったが、桜の表情があまりにも必死なので何も言えない。

「……じゃあ、もうちょっとだけ」

桜にとって、と桜に聞こえないように付け加えて、彼は再び腰を下ろした。

それをちゃっかりと聞いていた桜は泣いたままに少しだけ笑う。

「……天人くん、優しいんだ」

「どうだろう。自分じゃそこら辺はよく分からないけど」

「桜がいいって言うまでいてくれるんでしょ？」

「……聞こえないように言っただつもりだったんだけどな」

「桜、耳いいから」

軽口にもいつもの覇気がない。それがまた、痛々しい。

「でも、なるほどなあ。焰ちゃんとリリーさんが惚れちゃうわけだ。イケメンで性格もいい。加えて狩猟の腕前も凄いんだもん。完璧じゃん」

「褒めても何も出ないぞ？」

「……ちえ。期待してたのに」

わざとらしく唇を尖らせ、すねたように言う。それっきり、再び会話が途切れた。

ゆつたりと時間だけが流れていく。その間、天人は日が沈んで空が黒くなっていくのをぼんやりと眺めていた。時折、桜の様子をさりげなく確認しながら。

「……何も言わないんだね」

破られた沈黙に天人が顔を桜に向けると、彼女は困ったように笑っていた。

泣きはらした彼女の顔を見ていられず、視線を逸らして彼はぶっきらぼうに答える。

「少なくとも、俺の姉さんは何も言わなかったから」

「姉さん？ 天人くん、お姉さんがいるんだ。何歳差？」

「二つ。だから今は二十歳」

「へえー。職業はなに？ 天人くんのお姉さんだし、美人でしょ？ ギルドの受付嬢とか？」

その質問に、天人は閉口した。少しの間悩んだ素振りを見せると、やがて何かを決意したかのように頷いてゆつたりとした口調で語り始めた。

「いや。ハンターだよ。それも凄腕の」

「姉弟揃って凄腕なんだ。凄いね」

「いや、姉さんは俺なんかとは比べ物にならないくらい凄い人だよ。そう呟く天人の声色に、どこか羨望のようなものが含まれているように思えて、桜は言葉を失った。そこに自己卑下の原因の片鱗を見た気がしたからだ。

彼はぎこちない笑顔を浮かべて躊躇いがちに続ける。

「……俺さ、ここに来るまで、実は村中からいじめられてたんだ」「え?」

「いじめられてたは言いすぎかな。何だろう。失望? されてたんだと思う」

「どうして? 君の腕前、決して悪くないんでしょ?」

「ここではそうなのかもしれない。けど、故郷ではそうじゃなかった。……凄腕の兄さんと姉さんがいたから」

どこか昔を懐かしむように言う彼を、桜はじっと見つめる。

その表情はどこか疲れたきつたように見えて、彼の気苦労が窺えた。

「どつちもG級のクエストをこなすハンターだったんだ。兄さんは大剣をまるで太刀みたいに扱うような豪腕だったし、姉さんは自分が狙った的はどんな体勢でも外さないほどの正確さだった」

「G級……」

流石の桜もこれには絶句する。

ユクモ村には来ない、上位クエストのさらに上に行く危険度のクエスト。それがG級と呼ばれる最高難易度クエストだ。

一流のハンターがいると判断された村や街にのみギルド総本部から送られてくるそのクエストの内容は、規格外の大きさを誇るモンスター。例えばジエン・モラーンやラオシャンロンなど。の進行からの街の護衛や、熾烈な縄張り争いを勝ち抜き、鍛え抜かれた強靭な膂力や甲殻を持つ大型モンスターの狩猟など。そのどれもが

死の危険を充満させている。

それ故に確かな技量を持ったハンターしか受注することは出来ない。中途半端な技術を持った程度では、死に行くようなものだからだ。

天人の兄と姉はそんなクエストを弱冠二十歳程度で受注しているという。驚愕しないわけがなかった。

「はつきり言つて、俺と姉さん達との間には、天と地の差があったよ。そんな俺に、故郷の人々はみんな失望したんだ」

「……………」

「居場所がなかった。友人すらいなかった。家族も、兄さんと姉さん以外は俺をまともに見てくれなかった」

「……………天人くんに弓を教えたのつて、もしかしてお姉さん？」

「そ。俺じゃ剣を扱うのは無理だからな。故郷一の弓使いに、俺は弓の扱い方を習った。右腕じゃ矢が引けなかったから、特注で左利き用に作ってもらった弓でね。ま、持った当初は弓を持つことすらきつかったんだけどね」

「へえ」

「いつも近隣の草原に出かけてはケルビ狩りをしていたよ。最初のうちは姉さんもまだ下位だったし、特訓にも付き合ってもらえてたんだけどね。上位に上がったあたりからはその回数も極端に減ったよ。それでも、俺はずっとケルビ狩りを続けた」

「どうして？ ある程度慣れたらクエストを受けて実践してみるのが一番じゃない」

尤もな桜の質問に、彼はやるせなく笑って、

「受けさせてもらえなかったんだよ、故郷じゃ」

淡々とした口調でこう答えた。想定外の返答に桜は衝撃のあまり言葉につまる。

「そもそも、ギルドカードすら発行してもらえなかった。剣もまとも持てないような？ 弟さん？ が、弓なんて仮初の武器使ってどうするつもりだ、なんて言われてね。まともに取り合ってもらえなかった。流石に落ち込んだな、あれは」

「…… 実力も分らないのに、受けさせてもらえないなんて」

「まあ、俺、見ての通りヒョロいし。小さい頃銀に襲われて右腕が使い物にならないって言うことは村中の皆知ってたし。ある意味でしようがなかったけどね」

「だからって」

「まあ、泣いたよ。うん。滅茶苦茶泣いた。俺だって普通の人間だ。プライドだってある」

明らかに無理していると分かるぐらい明るい声で語る天人に、桜はいたたまれなくなった。

声をかけようにも、何を言えばいいのか分からず、開きかけた口から結局言葉が出ることはなかった。

そんな桜にも気づかず、天人はあくまでもなんでもない風に語り続ける。

「けどそんな時、ただずっと姉さんが傍にいてくれたんだ。何にも言わないで、ただずーっと。クエストで疲れていようとそれは変わらなかった。…… 涙は見られたくはなかったけど…… でも、それだけで、なんか落ち着いたんだよ。…… 一人じゃない気がして」

「泣いてるとき、ただそこに居てくれるだけで、何か安心できた。

だから、俺も黙ってた」

「…… いいお姉さんだね」

「俺には勿体無いぐらいの、な」

天人の言葉を否定するようにゆるりと焔は首を振る。

「そんなことないよ。桜も君が居て安心できたし。やっぱり姉弟だからかな？ 君が居るだけで、何となく桜も安心できた」

それはよかったと天人が笑う。それは確かにいつもの彼の笑顔で、

だから桜も安心したように笑った。

「とまあ、そんな俺を不憫に思った姉さんと兄さんが『こんなところで終わるのは勿体無い』って俺をユクモに送ってくれたんだ。姉さんと兄さんには、今でも本当に感謝してる」

「それじゃあ、桜もお姉さんに感謝しなきゃだね」

きよとんと天人が首をかしげる。そんな天人に茶目つ気たっぷりに焰は言った。

「だって、桜は君がここに居てこんなに安心してる」

「……………」

ストレートな桜の物言いに、天人は頬を赤らめて桜から視線を逸らした。

だから彼は気づかない。

桜の頬も、彼女の名前と同じ色に染まっていたことに。

再度、沈黙。

ただ空気は先ほどよりも幾分か軽い。桜の啜り泣きが聞こえなくなったからだろうか。先までの気持ちの悪い居づらさを天人は感じなかった。

そんな空気だったから、とでも言うべきか。

天人は桜をじっと見つめた。自分はここまで晒したぞ、とでも言わんばかりに。

彼女は参ったなあと困ったように笑った。

「言いたくないなら、無理には聞かないよ。だけど、今の話を聞いてちよつとでも自分のことを話していいと思ってくれたなら、俺も話した甲斐があったかな」

「……………天人くんってさあ。実は性格悪くない？」

「さあね。桜がそう思うのなら、そうなんじゃないか」

「やっぱり性格悪い」

苦笑して視線を窓の外へと流す。夜の街は昼間の賑やかさと打って変わって本当に静かだ。

やがて何か決心したように桜は頷いた。かと思えば立ち上がり、
寝室へと入っていつてしまう。

何事かと天人は暫く寝室を凝視していたが、中から彼女が取り出してきたものを見て彼は理解した。

「これさ、リーダーの遺品なんだ。……？王琴トドロキ？。ジンオウガの素材で出来た狩猟笛」

「これが……」

その武器を見て、天人は思わず顔を顰めた。損傷の仕方が酷い。

弦は全て切れ、全体がひん曲がってしまっただけでほとんど折りたたまれたようになってしまっている。鋭い牙の痕も目立ち、ギルド工房の最高機密とされる中身までもが少し見えてしまっていた。

最早狩猟笛と呼べるような代物ではない。しかし、彼女はそれを大切そうに抱えて何かを懐かしむようにぼろぼろの表面を撫でる。

「桜、別にリーダー達の家族と仲悪くないんだ。噂が先走っちゃってるだけで、桜が殺してないってこと、ちゃんと理解してくれてる」

「それはまあ、これを見れば……」

ギルドで作られた武器は、どれもこれもその強度は折り紙つきである。少なくとも、人間がこんな風に折り曲げることが出来るほどやわではない。

ましてや、人間、それも年端も行かない少女がこんな牙の痕をつけることなど、到底無理な話だった。

ひん曲がったボディ。飛竜よりも大きな牙の痕。相当大型のモンスターに襲われたことは想像に難くない。

「丁寧に頼んだら、武器だけ譲ってもらえたの。こんな状態だけでもよかったら……。ブリッツワークスと63式軍楽口風琴の修理は終わった。後は、これだけ」

「……これが理由か？」

天人の言葉には暗に？だからパーティを組まないのか？？という意味が込められていた。

桜もそれを理解していて、弱々しく笑って頷いた。

「桜達、四人のパーティだったんだ。桜以外みんなハンターランクが3で、すっごい強かった。でもって全員が狩猟笛を使うもんだからユクモ楽団なんて呼ばれてた。桜は偶々狩猟笛を使ってたからみんなの目に留まって入れてもらえたんだ。まだ新米だった桜を入れたみんなは、桜に合わせて難易度の低いクエストを受け続けた。桜のハンターランクをあげるために。そして、ある程度実力もついできた頃、緊急クエストが張られたんだ」

緊急クエストは、その性質上もらえるポイントが大きい。その性質とは、ずばり情報の不足だ。

その緊急性故に周辺の状況が普通のクエストよりも詳細には伝えられない。どんな状況の中の狩猟になるかという予想の正確さが大きく欠ける。

「依頼内容はドスジャギイの狩猟と人命救助。ユクモに物資を輸送していた商業者が襲われたらしくて、迅速な対応が必要とされてたの。もちろん、桜のランクが上がるいい機会だったそのクエストを受けた。そして あれは起きたの」

桜が目伏せる。天人はどんな話ができるのだろうかと身構えた。

語る速度を落として彼女は続ける。

「今思えば、あのときの溪流の様子はおかしかったわ。ガーグアの一匹もジャギイの一匹も居ない。静か過ぎた。生き物の音がしない森に、桜達はそれでも何の疑問もなく森へ入っていった。でも、暫く探し回ったって言うのに、ドスジャギイの姿は見当たらない。アイルーが輸送先を間違え立たんじゃなかったってキャンプに戻って確認しても、アイルーは間違っていないって言う。だから桜達はもう一回溪流を歩き回ってドスジャギイを探して歩き回ったわ。……そこで、聞こえたの」

「……何が？」

「地の底から湧き上がってくるような雄叫び」

声のトーンが明らかに下がった。目に見えて彼女の顔色が悪くなる。

天人が慌てて彼女を制する。

「い、いや。無理に話さないでいいから。別に俺、トラウマ穿り返そうってわけじゃないんだし」

「大丈夫。大丈夫だから」

そう言う桜の様子は明らかに大丈夫ではなかったが、決意に満ちた瞳にじっと見据えられ、天人はそれ以上言葉を紡げない。

「そして、いきなり周囲の木々が倒れていくの。あのユクモの木が爪楊枝みたいに簡単に」

ユクモの木というのは、ユクモ村周辺に生える高強度を誇る大木だ。衝撃に強く、腐食もしづらいユクモの木はさまざまな形で利用されている。建築物はもちろん、水車、橋、更には武器にも使われている。

もちろん、モンスターの攻撃を喰らってもそう簡単に折れてしまうことなどない。その場にいた桜の恐怖はもつともなものだった。

「段々と近づいてくるのが分かって、桜、怖くて……それで、リーダーが桜だけ逃げろって……」

「桜。分かった。もういいから、落ち着いて」
体を抱き、呼吸が乱れ始める。

これ以上は危険だと直感が告げていた。フラッシュバックなどされたら堪ったものではない。それだけは何としても避けたかった。

桜の背中をさすってやり、落ち着かせる。よっぽどの恐怖だったのだろう。桜は小刻みに震えていた。

「大丈夫。大丈夫だから。落ち着いて。深呼吸しよう。はい、吸って、吐いて。吸って、吐いて……」

恐慌状態に陥った桜の呼吸を整える。暫く深呼吸を続け、呼吸も落ち着くと桜は疲労の色が見える笑顔を浮かべる。

「あれ？ おかしいな……。桜、もう大丈夫なはずんだけどな……」

「トラウマはそう簡単には治らないよ……。俺もよく分かるから。無理はするな」

トラウマ 心的外傷は、自然災害や事故で被害を受けたり、身近な人の死を目の当たりにするといった体験をすることによって強烈なショックを受けることで生じる。

天人や桜の場合、そのトラウマによって心身に障害を引き起こす外傷後ストレス障害という、さらに質の悪いものだった。

彼は幼少の頃にリオウス希少種に襲われ死の恐怖を味わったことで、飛竜に対する絶対的恐怖を覚えてしまい、体が震えだしてしまっ

桜もまた同様の症状が見られた。彼女の恐怖の根源は天人と違い、状況に対するもの。？木々が倒れていく状況？や？仲間を置いていってしまうという状況？に彼女は異常なまでの恐怖感を覚える。その結果、今のように恐慌状態に陥ってしまう。

彼は納得した。なるほど。これではパーティを組むのにも支障が出るだろう。パーティなど、組みたくても組めない。

自分もその経験がある天人は桜が今どんな心境でどんな体調なのか、凡その見当がついた。

「もう寝たほうがいい。不安なようなら、今から焰かりりーさんの家に行こう。こういうときは一人で居るより誰かといたほうが安心するから」

「うん。ありがと。でも、大丈夫だから」

「そうやって無理をする。パーティ仲間ではないけど、ハンター仲間ではあるんだろ？ だったら頼られて少しは。焰もりりーさんもいい人ってことは知ってるだろ？」

「うん。でも、本当に大丈夫。ちよつとパニックだったけど、もう平気。そう言っただけで笑ってみせる桜。その顔色はやはり優れないものの、多少は落ち着いていたようだった。

「……本当に大丈夫か？」

「うん。心配しないで」

「心配はするよ……あんな姿見せられちゃな……」

「ごめん。でも大丈夫だから」

自分が元気であることをアピールするように、力瘤を作ってみせる。彼はそんな桜の様子に安心し、苦笑して頷いた。

「分かった。無理はするなよ。……じゃあ俺は帰るけど」

「うん。お休み」

「……お休み」

別れを交わすと、彼はどこか躊躇いがちに部屋を出た。

自宅への帰り道。彼は彼女との会話を思い出しながら何となく空を見上げた。

空は雲に隠れ、星は一つも見えなかった。

二つの過去（後書き）

大変長らくお待たせしました。

次回、ついに戦闘シーンに入ります（

次回は1月2日に投稿予定です。

戦闘、雷狼竜

天人が桜と過去の話をした翌朝。昨夜、彼女のことを気になってよく寝付けなかった彼は珍しく太陽が昇りきった頃に起床した。

外が騒がしい。どうやら村中がざわめいているようだ。彼は寝ぼけ眼のままふらりと外に出る。

どうも村の様子が違う。あちこちで村人が困ったような表情で立ち話をしている。一体何事かと天人は彼の宿舎の傍で話をしている村人に声をかけた。

「おはようございます。一体何の騒ぎですか？ 何か皆さんお話してますけど」

こちら辺で天人の名前を知らない者は少ない。話しかけられた村人は最近よく話に聞く新人ハンターから声をかけられて驚いたような素振りを見せる。

それからハツとしたように、村人は口早に語り始めた。

「それがよう。ここ最近、どうも溪流が荒れてると思ったら、ジンオウガがいたらしんだよ」

「そうそう。何でも、牧場にいたガーグアの半数がやられたらしい。可愛そうに。あいつ、大赤字だって怒り狂ってたぜ」

「それは……」

雷狼竜、ジンオウガ。その二つ名の通り、雷を操る狼のような姿をしたモンスターだ。

牙竜種に分類されるこのモンスターはユクモ村やモガの村周辺、溪流や孤島で最近によく出没するようになったが、それ以前はあまり姿を見ることはなく、知名度はそれほど高くない。それ故、研究がこの二地域でしか進まず、生態系の説明が遅れているモンスターだ。

起伏の激しい山林を好み、それ故にかぎ爪は鋭く、四肢は強靭に

発達している。その強靱すぎる四肢を使った巧みな？狩猟？。餌となるガーグアやケルビをその巨軀からは想像も出来ないような俊敏さで仕留めるのだ。

また、そのガーグアの餌である雷光虫との共生も確認されている。ジンオウガの遠吠えに呼応するように雷光虫はジンオウガの体に纏わりついていく。体毛や蓄電殻に引つ付いた雷光虫は放電を始め電力を供給、蓄電を開始する。自分自身による発電能力は他の雷を扱うモンスター　　ここらでは確認できないが牙獣種のラージャン、この地域でも見られる例で挙げればギギネブラ亜種などがいるにやや劣るものの、それを雷光虫との共生によって克服したのだ。

加えて、纏わりついた雷光虫は引つ付いている限りほとんど永久に電力を供給する。つまり、その間ジンオウガは自分で発電する必要がなく、スタミナの消費もかなり抑えることが出来るというわけだ。

この様に合理的に進化したこのモンスターは、この雷光虫を纏った状態　超帯電状態と呼ばれる姿になってこそ、その脅威を発揮する。発達した強靱な四肢と強力な雷撃を活かしたアクロバティックな攻撃は、数多のハンターを葬ってきた。

もちろん、過去に受けた村の被害も決して少ないものではない。ギルドと温泉の二つが主な資金源であるユクモ村は、家畜が襲われるといった直接的被害だけでなく、温泉目当てのお客が減るという間接的被害も大きく受ける。

こういった事情があるため、中にはジンオウガを？災厄？と呼ぶものまでいた。

「あんだ、最近噂されてる気体の新人さんだろ？　どうにかなんねえかなあ」

「いや、流石にそんな簡単には……」

「そこをなんとかやよう。俺達も困ってたんだ。話によれば何でも村一番の凄腕らしいじゃねえか。本当はどうにかできるんだらう？」

「は？」

噂とは怖いものだ。知らない間に一人歩きし、本人の意思とはまるで関係なしに膨らんでいく。

彼はそんな噂まで流れていることに驚愕した。ハンターの間の評価が高いことは知っていたが、村一番のハンターなんていう話は聞いたことがない。

「いや、村一番じゃないですから」

「凄腕ってところは否定しないんだろ？　なら何とかしてくれよ」

言葉とは難しいものである。彼は脱力した。

「言葉の綾って奴です。実際には大したことありませんよ」

「……なんだ。結局、あんたもそこら辺の凡人ハンターと変わりねえのかい。畜生。早く帰ってこねえかなあ、時雨さんはあ」

頼りにならないと分かった途端にこれである。別に期待されたいとかそんな願望はないが、いくらなんでもあんまりな態度だった。

しかし天人は不満を表情に出すことなく苦笑いですいませんと謝ると、会話の輪から離脱した。ともかくギルドに行ってみようと思っただのだ。これだけの騒ぎだ。もしかしたらリリーや焰もいるかもしれない。

足早に自室へと戻る。手早く装備に着替え武器を背負うと、彼は部屋を飛び出し一目散に駆けだした。

ギルドに到着すると、そこにはやはりリリーと焰の姿があった。急いで彼女達に駆け寄ると相手もこちらに気づいた。リリーが手を振り、焰が鼻を鳴らして天人を迎える。

「珍しく遅いじゃない」

「ごめんごめん。ちよっと寝過ぎして。……それで、ジンオウガは」

「ええ。私達も一応クエストの内容だけでも確認しようと思って来たんだけど……」

リリーが言葉を切って首を振る。それだけで、既にクエストは受注されたということが伝わる。彼は眉をひそめた。

村人の話を聞いた限り、今ユクモでジンオウガを相手に出来るハンターはいなさそうだった。もしもいるならわざわざ噂程度にしか実力の知れない天人に彼らも懇願したりしなかつただろう。だといふのに、既にクエストは受注されている。それもまだ十時にもなっていない。そこまで性急に受ける必要等あつたのだろうか。

そこまで考えて、彼は何か引つかかった。

(……ジンオウガ？ 性急？)

ブリッツワークスと63式軍楽口風琴の修理は終わった。後は、これだけ

桜が昨日、手に持っていた武器は何だった？ 王琴トドロキとは、一体なんの素材を使った武器だ？

「……まさか」

最悪の想像。一人合点の言ったように呟く彼に首をかしげる二人を置いて、足早に受付へと向かう。普段にはない彼の行動に、二人はさらに目を丸くした。驚きに頭が今の状況を処理しきれず、足が動かない。

近づいてくる天人に気づいたササユがいつものスマイルで声を挨拶をしようとしたが、鬼気迫る天人の形相に呆気を取られ、息を呑むに終わった。

受付に手をつき、身を乗り出すようにして天人はササユに話しかける。

「ササユさん、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」

「は、はい。何でしょう？」

「ジンオウガのクエストを受けたハンターって、桜ですか？」

ギルドの受付嬢には他のハンターの情報を守秘する義務がある。

それは周知の事実で、ハンターなら誰もが知っているようなことだ

った。

もちろん、そんなこと天人だつて承知している。だが、聞かずにはいられなかった。ハンターとしての技術は一流だとしても、一人で未知のモンスターとやりあうなど危険すぎる。

普段のササユだつたら、すみませんが……とこの質問を拒否しただろう。しかし、普段温厚な彼の切羽詰った形相に圧倒されたササユは咄嗟に頷いてしまった。それから「あっ」と声を漏らして口を押さえたが、もう遅い。隣にいるコノハも言葉を失つて口をぽかんと開けている。

「そう、ですか……」

意気消沈といった様子で天人の表情からみるみるうちに気力が失われていく。

一方のササユも、守秘義務を破ってしまった自責の念から呆然としている。そんな二人の奇妙な様子にハツと我に返ったりリーと焔は、ようやく彼へと駆け寄った。

「ちよつと！ どうしたよの天人」

「っていうか、ササユさんもどうしたの？ 何か、あなたらしくもない落ち込みようだけど」

「私は……私は……受付嬢失格かもしれません……」

「ね、姉さん。今のは不可抗力だよ。仕方ないって。そ、それに今の聞いてたの私と天人さんだけだし、私達が漏らさなければ大丈夫だつて」

この世の終わりのような顔をするササユを引きつった笑みでコノハがフォローするといふなんとも奇妙な光景に、リリーも焔も何事かと動揺を隠せない。

この後、コノハからこつそりと事情を聞いた彼女達は、なんともコメントしづらい微妙な状況に閉口するしかなかった。

「ふう……」

はらはらと散る木の葉。流れる清水。美しい渓流の景色を見やりながら、川縁の手ごろな岩に腰掛けた桜は一息ついた。

今彼女がいる場所は、足が全部つかれる程度の渓流の浅い下流部分だ。既に結構な距離を歩いているが、まだジンオウガに出くわしていない。先ほどから見かけるのはジャギヤブルファンゴばかり。

桜は嘆息した。本当にジンオウガはいるのだろうか。

彼女が愛用する武器、狩猟笛は当然ながらそこそこの重量がある。持って歩くだけでも少女には結構な重労働になる。

もちろん、彼女もハンターという過酷な職業に就いてそこそこ経つ。体力は人並み以上だという自信があるが、そうは言ってもやはりつらいものはつらい。

加えて今回の相手はかのジンオウガだ。緊張も普段受けるようなクエストに比べてはるかに大きい。心労は疲労に直結する。彼女の疲労は然るべきものだ。

「ああもう！」

苛立ちを隠そうともせず、思い切り水面を蹴りつけた。静けさに水の爆ぜる音はやけに響いた。

遠吠えが聞こえたのは、直後。

やっと見つけた。彼女はしかし喜ぶことなく、むしろより一層緊張感を増した顔つきで武器を構えた。

63式軍楽口風琴を肩に担ぐようにして持ち上げ、周囲を見渡す。
……姿は、まだ見えない。

とくんとくんと心臓が跳ねる。気持ちの悪い汗が背中を流れてい

く。

張り詰めた緊張感。耳の痛くなるような静けさ。やがて、その静けさは破られた。

挨拶代わりに飛んできたのは球状に固められた雷撃。ゆるやかに、されど大きく弧を描くようにして迫るそれを桜は軽いステップで避けると、桜は狩猟笛を振るい、地に叩きつける。

狩猟笛の仕組みはギルド工房の最高機密の一つだ。その仕組みはガンランスなどと同様、関係者以外はだれも分かっていない。

特定の動作を行うことで笛の中で音色が決まっていき、それを開放することで旋律を奏でることが出来る。狩猟笛から奏でられる旋律は聞いた者の力を解放させる効果があり、その旋律によって効果も変わってくる。

もちろん、出鱈目な旋律だと全く効果が得られない。ちゃんとした旋律を奏でることが出来るようになるまで、狩猟笛を持って狩猟に出かけることは難しい。

その点、桜は手練だった。

笛身を膝で蹴り上げ跳ね上げて音色を繋げていく。そのまま頭上高く円を描くように振るい、叩きつけ反動で跳ね上げると溜めた音色と開放、演奏を開始する。

ここまでの一連にかけた時間は、五秒にも満たない。

63式軍楽口風琴から不思議な音色が奏でられる。歩きつかれた足が嘘のように軽くなる。なったところで、次の演奏へ連結させる。腕力に物を言わせた強引な方法で横一線、半円の軌跡を描いて笛を振るい、そこで桜の視界に？影？が映った。

文字通りの、影。桜の影まですっぽりと覆うように、それはあった。

（ 上!?! ）

脊髄反射に近い速度で彼女は思い切り前に跳躍。直後、それは降

ってきた。

青緑がかつた体に白い帯電毛。強靱な四肢にたくましい尾。全て、聞いてた通り。

「……待ったたわよ、ほんの一年ぐらい、ね」

シニカルに笑い、そう囁く桜の額に冷や汗が浮かぶ。

雷狼竜、ジンオウガ。逃げた自分に対する罰であると同時に、見捨てたかつての仲間への贖罪の、最後のピース。

先まで桜が立っていたところに思い切り突き刺さっているのは鋭い鉤爪。引き抜かれたその爪の長さを見て桜は震えた。しかし戦慄するのは一瞬、思考を切り替えて大きくバックステップする。

自分の縄張りを荒らす者、もとい獲物を目の前にジンオウガが吼えた。しかし、竦むほどのものではない。そのままゆったりとした足取りで移動し、獲物を値踏みするような視線で桜を見つめてくる。距離を詰められる前に、バック走でジンオウガを正面に捕らえたままに桜は更に距離を取った。

かと思えば、距離をとったはずの桜の目の前に、その姿が。

「！？」

迅い。それも、想像を絶するほど。

強靱な四肢で地を蹴るや否や、十分に取ったと思っただその距離は一瞬でゼロへ。焦りはしかし、その沸点を超えて再び彼女に冷静さを取り戻させる。

着地と同時に、ジンオウガは片方の前足を軸にするような動作を見せた。

今までの経験と培ってきた直感が、彼女を瞬時に地べたへと這わせる。

後ろ足で地を蹴ると、コマの様に体を一回転させその丸太のような尻尾を振るった。背中に感じる風と空気を切り裂く音がその威力を思わせる。

しかし怯んでいる暇などない。体を跳ね上げ、武器を構える。

ジンオウガは一回転するとそのまま片腕で自分の体を跳ね上げた。その体勢からバック転の要領でさらに尾を振るい、それを地面へと叩きつける　！

その身体能力に桜は驚愕した。話に聞いているよりも、全然運動能力が高い。

だが反応速度だけなら桜も負けていなかった。笛を自身の身を守るようにして構え、僅かに身をずらす。叩きつけられる尻尾を受け流し、火花が散った。

その衝撃を利用して素早く体を捻り回転させ、思い切り笛をジンオウガの鼻っ面へと叩き込む。

「っらああ！」

笛越しに桜に衝撃が伝わってくる。ジンオウガが上げた悲鳴が、その打撃の威力を示していた。

反動を活かし、大きくバックステップで再び距離を取る。ジンオウガにしてみればあってないような距離ではあるだろうが、それでも至近距離にいるよりもマシなはずだ。

怯んでいる隙にさらに音色を溜める。基本の旋律が出来上がったところで、しかしうなり声を上げジンオウガが距離を詰めてきた。今度はその隆起した筋力が目立つ腕で桜を叩き付けんとする。

舌打ちもそこそこに狩猟笛を抱えるようにして前転してこれを回避するも、さらなる追撃を仕掛けてくる。

避けきれない。そう悟るや否やせめて地面へと叩きつけられ大ダメージを受けるのを防ごうと身をずらした。

「っくう」

鉤爪が防具と皮膚を切り裂く。鮮血を散らしながらすさまじい衝撃に体が宙へと舞う。だが彼女はそんな状況すら　利用した。

急激に加速度を得た体を捻り、狩猟笛に更なる加速度を与える。まさかの反撃にジンオウガは反応できない。

さっきよりも確かな手応え、そして悲痛な叫びに桜は苦痛に顔を歪めながらも不適に笑う。

無理な体勢からの攻撃で受身も取れずに地面へと叩きつけられるも、すぐさま体を跳ね上げてジンオウガと対峙する。

傷の確認をする余裕などなかった。あの素早さ。一瞬とて目を逸らすことは出来ない。

（っ痛う。なにあの爪。一撃でスカラーぶった切るってどういうこと！）

スカラー装備の性能は確かなものだ。あらゆる衝撃を吸収し、更に斬撃や火炎、雷撃、冷氣などにもある程度の耐性がある。

それを易々と切り裂いたジンオウガに、桜はさらに警戒のレベルを引き上げる。

感触からして傷はそう深くない。少なくとも狩りに支障はきたさないレベルだ。まだ、行ける。

「っ
っ」

ジンオウガが動いた。二、三度軽く頭を振ると四肢に力を込める仕草を見せる。途端、大きく横っ飛びした。

しかし、その早い反応が仇となる。ジンオウガが飛んだのはユクモの巨木。大きく木は揺れるも、決して折れることはない。緩やかにしなつた大木はジンオウガを押し返し、更にそれを蹴ることで驚異的なスピードでジンオウガが突進を仕掛ける。単なる獲物ではないと警戒したジンオウガが直線ではなく、三角跳びの要領で距離を詰めてきたのだ。

「嘘でしょっ！」

悲鳴にも似た叫びを上げる。体格差を活かした突進は、既に跳んだ後の桜に回避のしようがなかった。

迷っている暇はなかった。即座に狩猟笛を盾にするように構え、衝撃に備える。

鈍い衝突音。脳が揺さぶられるような感覚に意識が飛びかけるも、歯を食いしばってそれに耐えた。受身を取る余裕すらなく無様に地べたを転がる。

されどほおけている時間などジンオウガは与えない。激しい水しぶきを上げ着地と同時に地を蹴り、更に獲物を追い詰める。

朦朧とする意識の中でも生きるための行動を彼女は止めない。それは最早無意識の行動だった。

狩猟笛を放り両手の自由を得、ポーチから素早く閃光玉を取り出すと口でピンを外し、目を逸らして投げずにそのまま前へと突き出した。それはジンオウガが彼女へと飛び掛る直前に発光する。

強烈な光に目を焼かれ、たまらずに怯んだ。だが彼女はまだ止まらない。

音爆弾を取り出すと、ジンオウガの角を鷲掴みにし思い切り跳躍してジンオウガに跨った。閃光玉同様に口でピンを外し、それをジンオウガの耳へと押し当てる。

炸裂。

ジンオウガが一際大きな悲鳴を上げて体をのけぞらせた。同時にジンオウガの背を蹴り、自分の武器のもとへと跳躍する。

ここまで来てようやく彼女の意識もはつきりとした。手放した狩猟笛を再び構えると、桜とは対照的に視覚、聴覚、そして三半規管に異常をきたし平衡感覚までもが奪われふらふらとしているジンオウガを殴打する。

「やああああ！」

頭上から振り下ろす一撃を決め、地面へと振り下ろし、そこから更に反動を活かし膝で蹴り上げ思い切り振り上げ、顎へと強烈な一撃を叩き込む。堪らずに怯むジンオウガを目前にそのまま音色を開放、演奏を開始した。

切れかけていた足の強化をかけ直したところで、更に狩猟笛を横一線に振るう。足を強打され、ジンオウガがバランスを崩し倒れた。その隙に先ほどは中断された腕力の強化の旋律を奏でる。それが

かけ終わるとほぼ同時にジンオウガも立ち上がった。

ふらふらとした様子はもうない。恐らくは眩暈から立ち直ったのだらう。

先ほどよりも緊張した面持ちで狩猟笛を構える。既に二つの基本旋律による強化は施してある。戦闘の準備は整っている。

だが、ジンオウガは今までのように距離を詰めてこなかった。どころか、？ジンオウガ自身がバックステップで大きく距離を取った？。

(？ あんなに攻撃的だったのに、どうして……？)

ジンオウガの意図が掴めず、かといって安易に動くことも出来ず、桜はそれを唯見守るしかなかった。

しかしそれは、最悪の選択だったことを、桜はすぐに知る。

戦闘、雷狼竜（後書き）

次回は1月3日に投稿予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5654w/>

MHP3rd 天を穿つ弓

2012年1月2日09時50分発行